市民社会をつくる
ボランタリーフォーラム
TOKYO

市民社会をつくる ボランタリーフォーラム TOKYO2017

暮らしの中から
動きだす、創りだす。

2017年
2月10日(金)～12日(日)
会場：飯田橋セントラルプラザ
ほか

報告書

主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017 実行委員会
後援	東京都
特別協賛	株式会社ガイア、グラクソ・スミスクライン株式会社、中央ろうきん社会貢献基金、トヨタ自動車株式会社、株式会社三菱東京 UFJ 銀行
協賛	NEC ネッツエスアイ株式会社、公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団、NPO 法人 モバイル・コミュニケーション・ファンド
協力	酒楽(さら)の里 あさひ山、認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK、全労済、ペルノ・リカール・ジャパン株式会社（五十音順）

【お問い合わせ】東京ボランティア・市民活動センター　TEL：03-3235-1171　FAX：03-3235-0050
フォーラムホームページ：http://www.tvac.or.jp/vf/
フォーラム Facebook：「ボランタリーフォーラム tokyo」

ボランタリーフォーラム tokyo　検索

HP

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、これまで「ボランティアまつり」「ぼらんてぃあ・めっせ」「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、ボランティアや市民活動にかかわる方、関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017」（以下、V フォーラム）では、「暮らしの中から動きだす、創りだす。」をテーマに、25 分科会、3 特別企画を実施し、のべ 950 名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや声、実施しての成果や課題が掲載されています。また、職種や活動の分野も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ね、Vフォーラムの形を作り上げた記録も収められています。

より多くの方に本報告書をご覧いただき、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに
第１章　企画編
　市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017 ができるまで・・・・・・・・・・・・2
第２章　実施編
　市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017 開催概要・・・・・・・・・・・・・・6
　　各プログラム実施報告
　１　　発達障がいってなあに？～「ちょっと気になるあの人」を知るヒント～　●９
　２　　地域で“心のバリアフリー”を広げよう　●１１
　３　　NPO・地域活動に関わる人たちのキャリアにまつわる“もやもや”を語るカフェ　●１３
　２３　遠いようで近い社会１～現場から考えてみよう～　●１６
　４　　地域ってなに？居場所ってなに？映画『さとにきたらええやん』　●１８
　５　　市民と政治～投票すれば政治参加？～　●２０
　６　　若者を本気（マジ）にさせる活動作り　●２２
　７　　10 代のボランティア～育ち・育つ・カタチ～　●２５
　８　　学校と地域をつなぐ 2.5th プレイス「高校内居場所カフェ」　●２７
　９　　遠いようで近い社会２～私たちの暮らしに引き付けて考えてみよう～　●３０
　１０　ろう文化を話し合おう！　●３２
　１１　最近の若者事情からボランティアの受け入れを考える　●３３
　２４　差別を乗りこえる力　国立ハンセン病資料館を見学　●３５
　１２　交流会　●３７
　１３　地域でともに暮らす～施設の活動から考える私たちの地域　●３９
　１４　社会をよくする市民力～今こそ草の根！？～　●４１
　１５　選ぼう！再生可能エネルギー～知っていますか？電力自由化～　●４３
　１６　子どもの貧困～地域とのつながりをつむぐ～　●４５
　２５　「やってみよう」からつながる可能性 vol.1～精神障がい者フットサル体験　●４８
　１７　私にもできる！専門性を活かした地域活動　●５０
　１８　本音で話す。課題を解決する中間支援組織のミライ。　●５３
　１９　「やってみよう」からつながる可能性 vol.2～精神障害のある人の可能性～　●５５
　２０　ひきこもり高齢化～地域や社会とつながる～　●５７
　２１　イスラム教徒との交流会で、イスラム文化を理解しよう　●６０
　２２　クロージング～今日から　動きだそう　創りだそう～　●６２
　２６　「想いをかたちに」出会いの広場～民間助成金相談から　●６４
　２７　Open Cafe　●６６
　２８　ふれあい満点市場～NPO・NGO の作品展示販売　●６６
（参考）市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７０
実行委員会名簿・・７１
協賛・協力団体

<第 1 章>
企 画 編

ボランタリーフォーラムができるまで

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO（以下、「V フォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして 2004 年から開催してきました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員、それぞれの一歩につながることを目的としています。

実行委員会について

V フォーラム実施にあたり、今年度のフォーラムのあり方を検討するために、準備会を３回開催しました。準備会では、これまでのフォーラムを振り返るとともに、今年度取り上げたいテーマや、実行委員のあり方などを話し合いました。

その後、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーからなる実行委員会を立ち上げ、企画や当日の運営体制に関する話し合いを始めました。実行委員会は、ふり返りの回を含め、９回開催いたしました。

実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じる社会課題や関心事を、キーワードとして出し合いました。挙げられた多様なキーワードを「地域」「多様性・当事者性」「ライフステージ」「社会・制度・システム」の４つのカテゴリーにまとめました。実行委員は、それぞれのカテゴリーに分かれ、分科会を企画しました。

分科会企画については、分科会の企画案を持ち寄り、カテゴリーや実行委員会全体で企画内容について何度も話し合いを重ねました。こうした分科会の企画を進めると同時に、V フォーラム全体に関わる運営については部会を設けることで話し合いを進めました。

今年度は、当日までの運営に関わる「ファンドレイズ」「広報」、分科会の１つである「全体会（クロージング）」「交流会」について検討する４つの部会を設けました。部会では、「どのように協賛・協力を拡大していくか」、「どのように参加者を募るか」といった話し合いを重ねました。また、アンケート回答者 168 名のうち、約７割の方は「初めて参加した」と回答しており、より多くの方に V フォーラムを伝えることにつながりました。また、クロージング、交流会についても部会での検討を重ね

ることで、より参加しやすい形の企画になり、「これまでとは違った企画で良かった」、「気軽に参加することができた」等の声もありました。同時に、今年度は実行委員全員が何かしらのカテゴリーと部会に入り、話し合いをする形にしたため同じカテゴリー内の実行委員だけでなく、「分科会の企画だけでは話すことができない別のカテゴリーの実行委員とも一緒に進めることができた。」といった声がありました。

また、今回の「暮らしの中から動きだす、創りだす。」というテーマについても実行委員会内で検討を重ねました。参加者の方が日々の暮らしの中で感じる疑問や違和感、言葉にできない想いをＶフォーラムを通して共有してほしい、明日からの一歩を踏み出すきっかけにしてほしいという想いから、このテーマに決定し、すべての分科会から共通して意識されるものとなりました。

分科会企画案の公募

これまでのＶフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマを取り入れることをねらいとするため、昨年度に引き続き、分科会企画案を公募しました。分科会企画案の公募が採用された場合もそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきました。また、他の分科会についてともに内容を検討し、Ｖフォーラム全体の運営にもかかわっていただきました。

募集概要と実施結果

【内容】

- ボランタリーフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供
- 2017年2月10日（金）～12日（日）の内１コマ
- 予算は、30,000円まで

など

【条件】

- 実行委員会への参加が可能であること
- 企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること
- 40名定員の会場内で実施できる規模の企画など

【応募方法】

- 所定の企画書（A4サイズ２枚）に記載の上、郵送・メールにて申込

【応募期間】　2016年６月１日（水）～６月28日（火）

【結果通知】　2016年７月１日（金）

実施結果

- 応募件数　６件
  採用件数　２件
- 応募者所属内訳
  市民活動団体・・・・・・・・・・　２人
  ボランティア・市民活動推進団体　３人
  企業人・・・・・・・・・・・・・　１人

選考のポイント

- 社会課題をテーマにした企画である
- 広く一般を対象にした企画である
- 多様な市民の参加が期待される企画である
- 本フォーラムで波及効果が期待される企画である
- 他団体との連携・協働が求められるような企画

＜第２章＞
実施編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017
開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会課題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004年から開催してきました。初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、実践の中で直面している課題や想いをもとに、時間をかけてつくりあげ、新たな気づきや参加の輪を広げる機会としています。暮らしの中でふと感じる疑問や違和感、言葉にできない想いを他の人と共有することで、新たな一歩を踏み出すきっかけにしてもらいたいとの願いから、今年は「暮らしの中から動きだす、創りだす。」というテーマに決定しました。私たちの一歩が、誰もが暮らしやすい社会につながるのではないでしょうか。参加者のみなさんの声や想いを大切に、このフォーラムを、誰もが参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしていきたいと考えます。みなさんのご参加をお待ちしています。

開催概要

テーマ	暮らしの中から動きだす、創りだす。
開催期日	2017年2月10日（金）19:00～21:00 2月11日（土）10:00～18:30 2月12日（日）10:00～17:50
会場	飯田橋セントラルプラザほか
主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2017 実行委員会
後援	東京都
参加費	一般 2,000円（1分科会のみ参加の場合は1,000円） 大学・短大・専門学生 1,000円（1分科会のみ参加の場合は500円） 高校生以下、または18歳未満の方　無料 ※No.12「交流会」は、軽食代として別途500円（18歳未満は300円）が必要です。 ※フィールドワーク（No.23～24）は、別途費用が必要です。（交通費など）

参加者実数	396名
一般参加者	269名
関係者	8名
出演者	53名
実行委員	27名
運営スタッフ・ボランティア	39名

参加者述べ数	950名
一般参加者	624名
出演者	76名
実行委員・運営スタッフ	250名

スケジュールと会場

日	時間	会場	プログラム
2月10日	19:00～21:00	12階C会議室	1 発達障がいってなあに？～「ちょっと気になるあの人」を知るヒント～
		10階A会議室	2 地域で”心のバリアフリー”を広げよう
		10階B会議室	3 NPO・地域活動に関わる人たちのキャリアにまつわる”もやもや”を語るカフェ
		フィールドワーク	23 遠いようで近い社会1～現場から考えてみよう～
2月11日	10:00～12:30	12階A・B会議室	4 地域ってなに？居場所ってなに？映画『さとにきたらええやん』
		12階C会議室	5 市民と政治～投票すれば政治参加？～
		12階D会議室	6 若者を本気（マジ）にさせる活動作り
	10:00～16:30	10階A・B会議室	7 10代のボランティア～育ち・育つ・カタチ～
	14:00～16:30	12階A会議室	8 学校と地域をつなぐ2.5thプレイス「高校内居場所カフェ」
		12階B会議室	9 遠いようで近い社会2～私たちの暮らしに引き付けて考えてみよう～
		12階C会議室	10 ろう文化を話し合おう！
		12階D会議室	11 最近の若者事情からボランティアの受け入れを考える
		フィールドワーク	24 差別を乗りこえる力 国立ハンセン病資料館を見学
	17:00～19:30	10階A・B会議室	12 交流会
2月12日	10:00～12:30	12階A会議室	13 地域でともに暮らす～施設の活動から考える私たちの地域～
		12階B会議室	14 社会をよくする市民力～今こそ草の根!?～
		12階C会議室	15 選ぼう！再生可能エネルギー～知っていますか？電力自由化～
		10階A会議室	16 子どもの貧困～地域とのつながりをつむぐ～
		フィールドワーク	25 「やってみよう」からつながる可能性 vol.1 ～精神障がい者フットサル体験～
	14:00～16:30	12階A会議室	17 私にもできる！専門性を活かした地域活動
		12階B会議室	18 本音で話す。課題を解決する中間支援組織のミライ。
	14:00～16:00	12階D会議室	19 「やってみよう」からつながる可能性 vol.2 ～精神障害のある人の可能性～
	14:00～16:30	10階A会議室	20 ひきこもり高齢化～地域や社会と繋がる～
	13:30～16:30	10階B会議室	21 イスラム教徒との交流会で、イスラム文化を理解しよう
	16:50～17:50	12階BCD会議室	22 クロージング ～今日から 動きだそう 創りだそう～
2月11日・12日		10階フロア	26「想いをかたちに」出会いの広場 ～民間助成金相談～（11日：14:00～16:30 / 12日：10:00～12:30）
2月11日・12日		10階フロア	27 Open Cafe（11日・12日：9:30～17:00）
2月11日		1階区境ホール	28 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～（10:40～15:30）

1　発達障害ってなあに？
～「ちょっと気になるあの人」を知るヒント～

開催目的

コミュニケーションの取りづらい、「ちょっと気になるあの人」、思い当たる方はいませんか？もしかしたらその人は発達障害かもしれません。この分科会を通して、そんな彼/彼女とのコミュニケーションをよくするヒントを見つけに来ませんか？実はこのヒント、どんな人とのコミュニケーションにも役立ちます。すぐに実践できますよ。

開催日時

２月１０日（金）19:00～21:00

参加者数

３５名（参加者２８名、出演者１名、スタッフ６名）

出演者

国沢　真弓さん（一般社団法人発達障がいファミリーサポートMarble／
フリーアナウンサー）

内容

1、オープニングメッセージ（音楽・映像・ナレーション）

「みんなちがって、みんないい」

講師より、講演の初めに毎回行うメッセージを伝えていただきました。法人を立ち上げた際の思いなどが語られました。

2、発達障害への理解を深める～疑似体験もしてみよう！～

発達障害、中でも自閉症スペクトラム障害に焦点を当てて特性について説明をしていただきました。

その後、２つの疑似体験を実施しました。１つ目は発達障害の人の「感覚」と「気持」の体験、２つ目は「シングルフォーカス」の体験でした。

3、グループトーク＜１＞

1）自己紹介

2）疑似体験の感想等

初めのグループトークだったこともあり、時間が足りないようでした。ご自身の身近な人の様子や、疑似体験をしてみて「急かされて焦った」「疑似体験自体初めてでおもしろい」等の感想も聞こえました。

4、発達障害の人への接し方（説明、便利グッズ紹介）

伝える時の表現の仕方や環境の作り方などポイントを絞っての説明でした。講師自身の自閉症の息子さんを育てていく中で使用したグッズも、実物を見せながらご紹介いただきました。

5、グループトーク＜２＞

１）実生活でどう活かしていくか

２）どんな配慮・工夫ができるか

講師手作りのグッズの工夫について感想が飛び交いました。身近に発達障害の方がいる参加者からは、普段の接し方と比べた感想なども挙げられました。

6、伝えるチカラをＵＰしよう！（説明、実践）

プロのアナウンサーとして、伝え方のコツを５つに絞ってお伝えいただきました。ご自身の子育ての中での成功談も交えながらのお話でした。

7、ラストメッセージ（音楽・映像・ナレーション）

「息子の障害が判った日の空」

子育ての中で息子さんと向き合った当時の思いが語られました。

8、質疑応答

成果と課題

タイトルや紹介文の通り、「ちょっと気になるあの人」が身近にいる方に参加してもらいたい、と思って企画しました。アンケートを見ると、「少しでも活かして接していきたい」「ヒントを頂きました」などといった感想が見られました。「ちょっと気になるあの人」のいる、実際の暮らしにつながる分科会になったのでは、と思います。

講師の方は、「自閉症の息子の親」「自閉症スペクトラム支援士の資格をもつ専門性」「アナウンサー」という３つの立場の経験談や知識を交え、伝え方や接し方のヒントを教えて下さいました。何よりも思いが込められているため、わかりやすく胸に響くものばかりでした。全体で感想を共有する場などはあまり設けませんでしたが、最後には講師の方自身が涙する場面があり、その直後にあたたかい拍手が起こりました。最後の質疑応答もいくつか挙がり、「時間が少ない」といった声も聞こえました。「伝えるチカラをUP しよう！」の実践にあまり時間がとれなかったのももったいなかったかなと思います。参加した皆さん、できなかった皆さんにも、ぜひ国沢さんの他のご講演にもご参加いただければと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 専門家として、当事者として、経験に根ざした話で、わかりやすく理解がすすみました。肯定することが大切だということが、話される姿勢や態度からも伝わってきました。ありがとうございました。
- ２時間のタイムマネジメントがきっちりされていて進行がスムーズであった、タイトル通りの内容で疑似体験も含めて少し理解できた気がする、発達障害を理解し、社会の中で浸透していくには奥が深い。ありがとうございました。
- コミュニケーションの話が面白かったです。自らの日常の行動と照らし合わせて反省する部分も多く、心構えを改めようと感じました。また障害が他人事ではないという話もよかったです。

企画・運営

高橋　沙織（みたかボランティアセンター）【主担当・報告書】

高橋　義博（調布市市民プラザあくろす市民活動センター）

中川　径治（昭和電装株式会社）

2　地域で“心のバリアフリー”を広げよう

開催目的

２０２０年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本政府は「 誰もが暮らしやすいまちづくり 」を地域で推進する“心のバリアフリー”の活動を掲げました。果たして、大都市・“東京”では今後どのような取り組みが必要とされているのか？ 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動のあり方を通じて、地域においてどんな“心のバリアフリー”を実践するべきかを、出演者のお話しから学ぶ機会としました。

開催日時

２月１０日（金）19:00～21:00

参加者数

38名（参加者２８名、出演者４名、スタッフ６名）

出演者

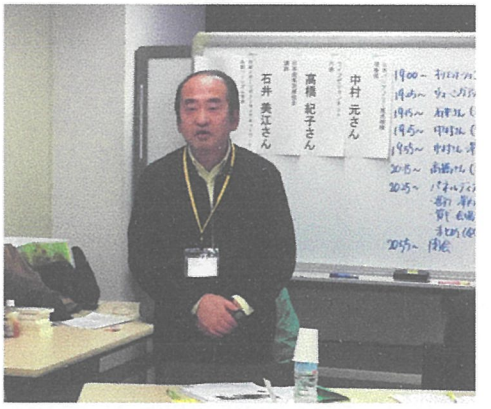
中村 元さん（日本バリアフリー推進機構 理事長 水族館プロデューサー）

澤内 隆さん（日本スポーツボランティアネットワーク 講師）

高橋 紀子さん（ライフビジョンネット 代表）

石井 美江さん（日本産業訓練協会　講師）

内容



出演者の澤内さんをコーディネーターに、各人の実践例から「心のバリアフリー」について語りました。「心のバリアフリー」＝おもてなし？優しさ？各ジャンルで活躍されている方々の視点がそれぞれ面白く、参考になる意見が多かったです。

「おもてなし」については、まずそれを行う自分がワクワクしていること。久し振りに帰国する友人をどう喜ばせるか？などを今度は海外の方々向けに大きな実践をする場となります。そしていよいよ、来年８月に東京都がオリパラボランティアを８万人一般募集しますが、スポーツや観光などと垣根を作らずボーダーレスでの活動が求められてきます。例えば、車椅子もタイヤが太かったり、キャタピラがあれば行ける場所が増えて、車椅子利用者もサポートを受けなくてもさまざまなところに行ければ立場も変わってきます。自分たちは書店で高い場所にある本を取ることも出来ないことがあります。果たして何をもって障害というのか？改めて考える必要もある時代にこそ、オリンピック・パラリンピックを通して体験をすべきと考えます。

水族館コーディネーターの中村元さんからは、バリアフリー観光＝福祉ではない街づくりが重要で、伊勢志摩のケースではバリアフリー対応をしたおかげで、

一般の人でも身体が少しでも不自由であれば利用しやすい旅館に変わります。自分たちが日頃考えていた常識を考え直してみる機会とのお話がありました。日本の新幹線が乗りにくかったり、皇居がわかりにくかったりします。駅でどこにエレベーターが付いてるかわからない状態。ボランティアとしてすべきことは、まずはこういう問題があるので、誰が来ても案内出来るように東京のさまざまなことをしっかり覚えることが重要なのかもしれません。障がい者の人たちのためにさまざまな対策がされていますが、例えば、学校に車椅子の生徒が入学した場合に、周りが協力して工夫することで問題が解決します。この状況で一番得をしたのは同級生で子ども時代に身についたことは一生大切にします。そんな何気ないことが地域でも自然に実行できれば、世界中から皆さんが訪ねて来ても東京の人たちは【地域】で対応することが可能なのでは、日本人の暖かさや優しさを2020年に向けてどんどん広げて行けたら素晴らしい観光都市【東京】になると感じらました。

成果と課題

「心のバリアフリー」について、幅広くさまざまな角度から考える機会ができたことは、オリパラでのボランティア活動をされたい方に対して少しでもヒントになったかと思います。内容は多岐に渡り、最後まで関心度が高いまま分科会を終えられたのは大きいです。その反面、まとまりも無くそれぞれの活動報告や思いなどが羅列しただけの印象も拭えず、「心のバリアフリー」に対して今回の進め方の中で方向性も提示した方がわかりやすかったかも知れません。参加者からも提案をいただいたら、地域での活動についても提示できた可能性があります。

参加者の声（アンケート結果などから）

＊自分自身の障害に対するものの見方を再考するきっかけとなりました。これまでの福祉制度の歴史も見直すことも必要。

＊全ての人がふつうに生活できる様子のイメージができました。話も大変おもしろく、興味深いものでした。

＊バリアフリーについて、これまでよりもナチュラルに大きなわくで考えるきっかけになりました。ありがとうございました。

企画・運営

鈴木　正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））【主担当・報告書】

小原　恵美（やのくち正吉苑）

酒井　玲奈（保育力研究所（キッチン図鑑））

高橋　紘之（東京ボランティア・市民活動センター）

3　NPO・地域活動に関わる人たちの キャリアにまつわる”もやもや”を語るカフェ

開催目的

NPO・地域活動に関わる人々の生活は収入や社会保障などの面で安定的ではなく、そうした仕事が魅力あるキャリア（職歴）として社会的に認められているとは言いがたい現状があります。どうしたらNPO・地域に関わることで生活を安定させ、キャリアの選択肢の一つとして考えることができるのか、その“もやもや”を話し合ってみませんか？

開催日時

2月10日（金）19:00～21:00

参加者数

28名（参加者19名、出演者3名、スタッフ6名）

出演者

関口　宏聡さん（認定NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 代表理事）

市川　望美さん（非営利型株式会社ポラリス 取締役ファウンダー）

石山　恒貴さん（法政大学大学院政策創造研究科 教授）

内容・成果と課題

1　NPO・地域活動に関するみんなのもやもや

＊収益を得る事への罪悪感があります

＊職業として子どもたちに勧められるでしょうか？

＊新卒ではNPOに就職できないのでしょうか？

＊地域をよくしたい信念を貫けるのか、本気で闘いたい！と思っています

＊「地域社会のために」って、こんなにハードル高いの？

＊目的にしっかり貢献しているNPOの見分け方はあるのでしょうか？

＊最近市民活動で働くことを諦める30歳くらいの人が身の回りにたくさんいます

＊NPO設立をしてみたいけど仕事を辞める勇気がなく、なかなか進められません

2　ゲストからの話題提供

1）市川望美さん

子育てをきっかけにNPOや地域活動に関わるようになり、その中で、当事者の居場所づくりからママたちの新たな仕事づくりへと関心事がシフトしました。地域には能力ある人たちが潜在的にたくさんいるものの、既存のしくみではそうした人々は評価されないのが現状です。これからの仕事の方向性は、1）

今の暮らしの中での働き方を最適化する、2）地域から新しい価値を創出する、の２つになると思います。人生100年とも言われる時代、「教育-仕事-退職」というこれまでの人生の３ステージ制は成り立たなくなるのではないでしょうか。この先一生仕事をする自信が得られたのはNPOでの経験があるから。自分の人生は自分で選べる、組み立てられる社会になるとよいと考えています。

2）石山恒貴さん

「パラレルキャリア」とは、職業キャリアのほかにもう一つの世界、ライフキャリアを持つことです（この反対はシングルキャリア）。働くだけでなく、いろいろな活動に関わることで人生が豊かになるのです。これは誰でもできること。というのも、今の時代は人生100年時代であり、2007年生まれの50%が107歳まで生きるそうです。となると、今までの人生を1.0とするとこれが1.5になる、働く（1.0）＋社会活動（0.5）＝1.5のように人生の選択肢が増えるわけです。親・子・地域人など、人生の役割を重ねることがパラレルキャリアと言えます。静岡県島田市など、地方でも人と人とのつながりや地域での役割を増やそうとパラレルキャリアを促進する試みが始まっています。

3）関口宏聡さん

学生の頃から生徒会活動や子どもの自然体験活動などを経験して新卒でシーズに就職、流れでNPO法の改正に関わってきました。皆さんからは「公務員や大企業は安定している」という意見もありましたが、公務員や大企業も危ない状況で安定しているとは言えません。一方、最近では非常に限られてはいますが年収1000万を超えるNPO職員も出てきています。自分の経験でいうと、NPO界隈では男性の寿退社や30歳定年説が都市伝説としてある中で、NPO職員でも子育てできる、ローンが組めることがわかりました（笑）。ただ、これからもNPOを続けられるかというと正直わかりません。NPOは社会問題が解決できたら解散すべきと言われていますが、そうなると無職になってしまいます。今後の人生の中でNPO活動はキャリアなのか地域活動はこれからどうなるのか、考えていきたいと思います。

3　グループトークでのもやもやとゲストのみなさんからのコメント

1）「まずはやってみよう」と言われるけど、本当にできるの？

キャリアの幅は徐々に広がっていて、その人のやってきたことでキャリアが決まります。だから、若いうちはやはり好きなことやるのが一番、「何をやっているのか」が大事。実際、人材紹介会社も仕事以外のキャリアに注目しています。例えばPTAの役員などの経験がキャリアとして認められるようになってきました。キャリアは途切れるものではなく、すべてつながっていると考えてよいと思います。

2）ボランティアとお金の関係が難しい。対価をもらって（支払って）いいもの？

NPOや地域活動に関わることで得られる大きな財産は人脈です。お金にまったくルーズだと関係は続きませんし、とはいえ給料を払うと労働対価を考えてしまいますよね。そのあたりの加減は人との信頼であり、コミュニケーション次第でもあります。例えば、「同じ条件で友達を誘えるか？」を基準としてはどうでしょう。支払うにしても、「お金を地域にめぐらせる」という投資的な考え方もあります。

3）NPO・地域活動をキャリアにするためにはどんなしくみがあるといい？

NPOで働ける人はある意味恵まれている方です。実際、自分でNPOを立ち上げてしまうと経営者になるので産休育休はありません。NPOでがんばる人を支えるしくみがもっと必要でしょう。例えば、アイデアとして、NPOに関わる人材を育成する専門学校のような「NPO大学」、NPOや地域活動にもら

える奨学金ならぬ「奨活金」、貴重な人材をシェアできるNPO同士の職員異動・一括採用を行う「NPO人事部」などはどうでしょうか。

4）まとめ：悩みを話せる場が大事！

本分科会を通じて悩みはみなさん共通していることがわかりました。もっと気軽に悩みを話し合える場があったらいいと思いました。若いうちは企業などで働く、そこで経験を積んだらNPOに移れるなど、「流動性が高まるような社会」が目標ですね。

参加者の声（アンケート結果などから）

＊参加しちゃってよかったのかなー？位でしたが、とてもいいお話を聴けて来てよかったです。おかげさまでだいぶスッキリ！たまたまチラシが目についてよかったです。

＊とても良い時間でした。こういう機会をつづけてほしい。

＊自分のもやもやを解決できただけでなく、ほかの方々のもやもやを聞けたことで、今まで自分の気付かなかった視点でNPOを見ることができました。

企画・運営

市川　徹（（株）世田谷社）【主担当・報告書】

長瀬　健太郎（NPO法人good！）

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

直井　友樹（NPO法人NICE）

小野　育実（明星大学）

２３　遠いようで近い社会 1～現場から考えてみよう～

開催目的

社会的偏見をもたれることの多い「風俗」ですが、その入り口は思っているより身近になっています。ただ、その出口を見つけるのが非常に難しい現実があり、そこに社会的偏見を伴う日本社会の実態があります。実際に風俗で働いた経験のある女性や風俗を辞めたい女性のセカンドキャリアを支援する講師から話を伺うことで、イメージではない「風俗」の実態を理解すると同時に、偏見が作りだす社会的孤立に気付いてもらいたいと本分科会を企画しました。また、遠い世界のことではなく自分たちと同じ社会のことであることを実感として理解してもらいたいと思い、会場を風俗店事務所としました。

開催日時

２月 10 日（金）19:00～21:00

参加者数

18 名（参加者 10 名、出演者４名、スタッフ４名）

出演者

角間　惇一郎さん（（一社）Grow As People 代表理事）

風俗で働く女性 M さん

風俗店店長 A さん（特別ゲスト）

キャリアカウンセラーB さん（特別ゲスト）

内容・成果と課題

実際の風俗店事務所での開催ということで、参加者も緊張気味でしたが、始めの店内ツアーで事務所のスタッフさんが気軽に挨拶をしてくれて緊張がほぐれました。まず、角間さんから「どんな状況にいても孤立せず、望めば次に行ける社会」を理念として活動していること、風俗の実態について話を伺いました。続いて、実際に風俗で働きながら次のステップを目指している女性と角間さんとの対談。特別ゲストとして、会場となった風俗店事務所の店長、女性のセカンドキャリアプログラムを担当しているキャリアカウンセラーの方からも各自の視点で話しをしていただきました。

お話しのポイント

- 「風俗」への入り口は多様で防ぐことは難しい。そもそも「風俗」の何が問題？という問いに明確に答えられる人はいない。
- 「風俗」で働いていることを知られたくない、という気持ちが強い。そのために、人との関係が途切れ、孤立していく。次に移りたい思った時に、相談できる人がいないのが問題。
- 「風俗」を否定しない事が大切。過去を聞かれないから「風俗」を選択する人もいる。
- 「風俗」で働くと、すぐお金になるし、休みも働く時間も自由。休んでも理由を聞かれない状況のため、いつの間にか感覚がずれている。
- 「風俗」を辞めたくても何ができるか分からない。空白の履歴書が１番困る。

・いろんな理由で「風俗」で働く女性がいる。お店側は、働く女性の相談も受けながら、いいお店を作りたいと思っている。

・セカンドキャリアプログラムを受ける際には、すぐに仕事を辞めるのではなく、空いた時間を使ってインターンなどをしながらスタッフと一緒に考えていく。

今回、現場に行って働く女性やスタッフの方からも話を聞くことができ、直接見て、感じる事が大切だと改めて感じました。一方、当事者を前にして「風俗」で働く女性について直接的な質問がしにくかった、という声もありました。ただ、参加者を女性に限定したこともあり、「風俗」で働く女性の事を理解しようという意識がとても伝わってきました。働く女性にもお店にも様々な考え方があります。それでも、セカンドキャリアを目指したいと思った時に、社会の理解が進み、社会としてセカンドキャリアを応援する体制が整っていけるといいな、と思います。また、社会の全ての人が偏見を持っているわけではない事も、しっかりと当時者に伝わるといいな、とも思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・ステレオタイプが、偏見や自分よがりの保護・政策につながり、事実を捉えられていないことに気付きました。事実をありのままの姿で知るために、直接会うことが大切なのだと学びました。

・風俗業界に限らず、偏見は世の中にたくさんあり、未来を描けていない人がいると思う。誰にでも、やりたいと思った時にやりたいことができる機会があるべき。

・親友がこの業界で働いているので参加してみました。心配をしていたけれど、見守り続けることもいい事なんだと思えたので良かったです。

企画・運営

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】

飯倉　聖子（NPO 法人みんなのおうち）

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

4　地域ってなに？居場所ってなに？
映画「さとにきたらええやん」

開催目的

人と人との関わりあいが希薄になり、地域のコミュティが失われつつある現在。映画「さとにきたらええやん」を鑑賞し、その後「地域で暮らすとは？」「子どもも大人も安心できる居場所とは何か？」を考え感じる。

開催日時

2月11日（土）10:00～12:30

参加者数

49名（参加者41名、コーディネーター2名、スタッフ6名）

内容・成果と課題

映画「さとにきたらええやん」の舞台は大阪市西成区釜ヶ崎、日雇い労働者の街と呼ばれてきたこの地で38年にわたり取組みを続けている「こどもの里」です。ここは障がいの有無や国籍の違いに関わらず、子どもが無料で利用することのできる居場所。この映画では困難さを抱えた子どもや大人に密着し、社会や地域、人との関わりについて考えさせられる内容になっています。

この分科会では、上映後それぞれ感じたことをシートに書いてもらい、その後6～8人ほどで集まり丸くなり、地域とはどのようなところなのか、居場所とは何なのかを話しました。その後シートを模造紙に貼り、全体共有。「温かいところ」「安心できるところ」「認めあえるところ」など複数意見が出ました。どのような地域にしたらいいのかまで話し合う時間がなかったのが残念でしたが、これを期に、それぞれが感じたことを地域で活かすきっかけになればと思っています。

参加者の声（アンケート結果などから）

1、とても胸にぐっとくる映画でした。こんな風にみんながみんなを支え合っていけるような社会をつくっていきたいなと思いました。

2、自分のボランティアでどう子どもと深く関われるかを考えるヒントがたくさんありました。

3、意見を共有する時間もあってよかったです。

4、観たかった映画でした。居場所づくりの重要性を感じました。

5、素晴らしい奥深いドキュメンタリーでした。又観たい映画です。映画後でのコミュニケーションもふりかえる意味で良かった。

企画・運営

粟澤　稚富美（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター　子育てカフェモグモグ）

【主担当・報告書】

志田　五十鈴（狛江市市民活動センター）

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

鈴木　正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

小原　恵美（やのくち正吉苑）

5　市民と政治～投票すれば政治参加？～

開催目的

改正公職選挙法の施行により、満 18 歳以上の若者も投票できるようになりました。これによって、若者の政治参加に対する社会的関心が高まっていますが、政治参加とは、ただ単に選挙に行くことではありません。この分科会では、18 歳選挙権をきっかけに行われるようになった、教育現場での活動や、市民活動について知り、市民の政治参加について考えます。

開催日時

2 月 11 日（土）10:00～12:30

参加者数

16 名（分科会参加者 10 名、出演者 1 名、スタッフ 5 名）

出演者

原田　謙介さん（NPO 法人 YouthCreate 代表）

内容・成果と課題

1 原田さんのお話

1)NPO 法人 YouthCreate の概要

大学時代の国会議員インターンをきっかけに、若者と政治家がお互いを知る機会を増やしたいと、2012 年に YouthCreate を立ち上げました。中学高校等で、公園づくりを題材に「合意形成を学ぶグループワーク」や「選挙以外の政治参画」について考える実践を行っています。また、学校周辺の写真を使って「政治と、生活の接点」を考える場づくり、「模擬選挙」も実施。その他、全国各地で地域の議員と若者が気軽な交流を行う「Voters Bar」、国政選挙の際に Yahoo!、Twitter と三者で、各政党にインターネット上で質問を行う「ASK NIPPON」等も行っています。

2)問題意識

2013 年に内閣府が 7 ヶ国を対象に行った「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では、「自国のために役立つと思うようなことをしたい」という質問に、日本の若者で賛成すると答えたのは 54.5%でした。東日本大震災等時代背景もあると思いますが、7 ヶ国中最多です。しかし、同じ調査の「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という質問には、日本の若者で肯定的に答えたのは 30.2%で 7 ヶ国中最少でした。

また、NHK が選挙権 18 歳の際に 18～19 歳に聞いた調査では、「政治のことがよく分からない者は投票しないほうがいい」という質問に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は 53%でした。以上のようなことに問題意識を持っています。

3)YouthCreate の考え方

実現したいことは「現代の少子高齢化社会における新たな民主主義プロセス」を作ること。詳しく言うと、「①自らの置かれている状況の認識」「②自分の意見の主張」「③他の意見との議論・すり合わせ」。このプロセスが大事です。

ただ、現状の課題として、「多様な関心と情報チャネル」「旧態依然としたままの政治過程」「コミュニティの希薄化と分離」があり、これを変えるため、若者への、そして若者からの働きかけをして行きたいのです。政治側と若者側の間をつなぎ、声を届け、距離を縮めたいと考えています。

ミッションは、「1.子ども・若者と政治が接する場を増やす」「2.子ども・若者が政治への知識への高める場を作る」「3.若者の政治参画を進める」。そして、意識していることは「1.選挙からスタートしない方法」「2.街のこと、地域の政治に注目」「3. 難しさ、真面目さだけではない」「4. 政治との双方向性」ということです。中学高校で、政治について尋ねると、国会や総理の話は出ても、地元の議会の話が出たことはありません。

4)「18 歳選挙権時代」の若者の政治参画

2016 年夏、選挙権が 18 歳以上になりましたが、将来、「2016 年は、選挙権が下がったことをきっかけに若者の参画が始まり出したよね」、そういう評価にしたいのです。

教育現場はこの 1 年で大きく変わりました。教育基本法第 14 条の 1 項には、「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない」と書いてありますが、第 2 項で、「特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない」とあります。また、学生運動が盛んだった昭和 44（1969）年に文部省が高校生の政治活動を禁止するという通達を出しました。これが、2015 年の秋まで残っていたのです。しかし、2015 年に新たな通達が出て、がらっと変わりました。「今後は高等学校等の生徒が、国家・社会の形成に主体的に参画していくことがより一層期待される」。そして、「自らの判断で権利を行使することができるよう、具体的かつ実践的な指導を行うことが重要」と 180 度変わりました。

私も関わって、全国の全高校生向けに、総務省と文部科学省で、政治や選挙に関する副読本が作られました。内容としては、「選挙に行こう」ではなく、例えば、「国家社会の形成者として求められる力」として、論理的思考力が必要ですよというような内容です。調査では、2015 年の秋に配られて、2015 年度中に、高校 3 年生に対しては、9 割 5 分以上の学校で政治や選挙に関する教育を行ったという回答が上がっています。

さて、参議院選挙の投票率ですが、18 歳は 51.28%、19 歳は 42.3%でした。全世代の投票率は 54.7%で、10 代の投票率は低いと言われていますが、私の実感としては、非常に高いと思っています。なお、20 代は 36.39%、30 代は 44.11%です。選挙は 7 月だったので、実は高校 3 年生の 1/4 くらいしか 18 歳になっていません。高校生だけで見ると、8～9 割が投票に行っています。

2 グループワークとまとめ

政治に参画するイメージを持つグループワークを行いました。最初に「私が変えたい現状」を参加者それぞれが考えます。その現状について、「自分自身」、また、「政治・行政」の「状況や関係を知る」「意見や疑問を持つ」「他の意見と出会う」ことについて考え、グループで共有しました。

「状況や関係を知る」「あなたなりの基準を持つ」「他の意見と出会う」、このプロセスをどう作っていくかが、政治との関わりでは重要なのです。

参加者の声（アンケート結果などから）

・政治参加というと狭いイメージを持っていたが（デモ・集会）、視点を変えることで動き方は変えられるのだと感じることができました。

・自分の街で何をこれからするか、少しヒントがもらえた気がします。

企画・運営

鹿住　貴之（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK）

6　若者を本気(マジ)にさせる活動作り

開催目的

若者世代に活動に参加してほしい。継続的に関わってほしい。彼らにどうアプローチすれば活動の参加につながるのか。いったい、何が若者の心をつかみ、動かすのか。この分科会では、若者をうまく巻き込んでチームをつくり、一緒に社会課題に取り組む団体の事例を元に、若者を本気にさせる工夫について考察していくのを目的とし、開催しました。

開催日時

2月11日（土）10:00～12:30

参加者数

38名（参加者30名、出演者3名、スタッフ5名）

出演者

呉　哲煥さん（NPO法人CRファクトリー）

宮崎　猛志さん（NPO法人国際ボランティア学生協会IVUSA理事・危機対応研究所所長）

入山　忠さん（NPO法人green bird事務局長）

内容・成果と課題

1、登壇者の紹介

グループワーク

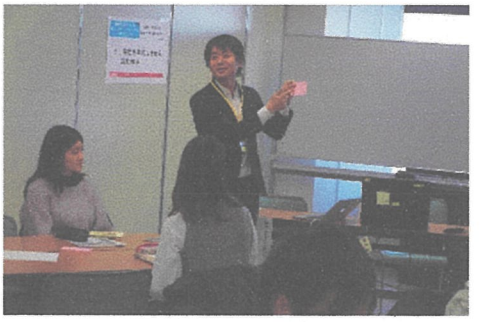
・参加者の自己紹介（名前、団体など）

・グループごとに分かれて「どうしてこの分科会に参加したのか。」動機や理由を話し合いました。

参加動機（例）

自団体に20代の若者の参加が希望ですが、何に興味を持ってくれるのかわからない。（NPO団体）

学生の主体性を引き出すことが難しい。学生がその気になるまでに時間がかかる。（大学ボラセン職員）



2、登壇者の事例発表

1）IVUSA　宮崎さん

若者を本気にさせる活動の事例として、NPO 法人国際ボランティア学生協会 IVUSA の事例報告を行いました。IVUSA は、学生中心の組織で活動をしています。また、その構成員も学生の選挙で選ばれています。選挙で選ばれた学生はコアスタッフとなり、活動の運営を任されています。コアスタッフが活動の中心を担い、事務局が全体をサポートする体制をとっています。学生中心の組織運営を行う中で若者たちを本気にさせるポイントをあげていただきました。

○IVUSA の「若者を本気にさせるポイント」

・学生は、学生の言うことしか聞かない。

憧れている先輩や一緒に頑張っている同期からの言葉でやる気になります。

・事務局と参加者との間に立つコアな学生を育てていく。

事務局と参加者の間に立つコアな学生を育てて、事務局が伝えたいことの代弁をしてもらっています。

・活動していることのメリットを明確に伝えること。やりがいを感じさせる。

学生たちに活動の役に立っていることを丁寧に伝えています。その活動をすることでどんな意味があるのかまで落とし込んであげることが、学生たちのやりがいに繋がります。

・定期的なメンタルケア

学生は活動中に様々な悩みを抱えます。その際、職員が学生の相談をいつでも受けられる体制を整えています。

・大人の心が折れないこと

コアな学生を育てていくにはすごく時間がかかることです。学生と一緒に活動を進めていくには根気が必要です。

2）greenbird　入山さん

greenbird は、2003 年に表参道で活動をスタート。街中でゴミ拾いを中心に活動を続けています。全国規模で学生が中心となり、活動を続けています。どうして、若者が夢中にゴミ拾いをしているのか。若者が活動に夢中になるポイントをお話しいただきました。

○【若者を本気にさせるポイント】

・気軽さとゆるさ

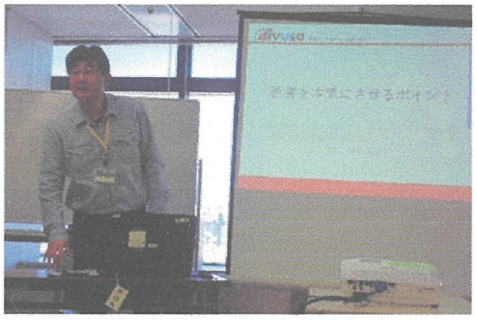
活動に個人のノルマはありません。気軽に誰でも活動に参加できるようにしています。

・ごちゃまぜ

活動には、幅広い年齢層の参加者が集まり、フラットな関係でゴミ拾いをしています。普段なかなか出会えない層の人たちと出会い、関わる場にしています。

・楽しみながら活動をする。

活動の中に必ず遊びを取り入れています。活動とおもしろいことを絡めて、活動を広げています。若者受けするものを作るのではなく、自分達も楽しいと思うことをしています。学生に媚びることではなく、自分が楽しいと思うことをやるのがいいのではないかと思っています。



3）成果とまとめ

ボランティアには動機づけがとても大切です。活動をすることで何を得られるのか。受け入れ側が考えなければいけません。活動を通じて、ボランティアに非金銭的な報酬をどのように支払っていくかがポイントです。

若者を本気にさせるポイント（非金銭的な報酬）のまとめ

- 成長を感じさせること…参加者は、自分の視野が広がったり、知識が増えたりすることでやる気になります。
- 承認、受容を感じさせること…参加者は、活動先で自分の存在が認められることで、安心感を持って活動に取り組めるようになります。
- 感謝すること…参加者は、受け入れ側から感謝されることで、また活動に参加したいという気持ちになります。
- 貢献感、自己肯定感を持たせること…参加者は、自分が役に立っているという感覚を持つことで、活動のやりがいを感じるようになります。
- 夢、使命感…参加者は、自分の夢や目標と活動の意味の結びつきを理解することで、使命感を持って活動に取り組むようになります。

これらのことを意識して、来てくれたボランティアが非金銭的な報酬を得られるようにするとともに、受け入れ側がコアな学生を育てていくことが大切です。組織の中で、学生が学生を集め、先輩・後輩の関係ができていくと、学生がボランティア活動に継続的に参加する仕組みができていきます。

4）質疑応答

成果と課題

- 実際に活動されている人の話を具体的に聞けたことや主な報酬の中で特に重要なのは「承認・受容」と「楽しさ」の２つ聞けたのが良かったです。
- 学生を取り込む組織が色々ある事がわかりました。報酬は何かも判った。「楽しい」事が大切だとわかりました。

企画・運営

長瀬　健太郎（NPO 法人 good!）【主担当・報告書】

直井　友樹（NPO 法人 NICE）

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

和田　更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）

7　10代のボランティア～育ち・育つ・カタチ～

開催目的

ボランティア活動は大人のみならず、中・高生にも広がりつつあります。中・高生ボランティア活動においての悩みや問題点の共有、大学生の活動発表を聞き、中・高生が取り組んでいるボランティア活動の内容を充実させ、幅を広げることがこの分科会の目的です。

開催日時

２月11日（土）10:00～16:00

参加者数

５３名（参加者36名、出演者５名、スタッフ12名）

出演者

―中学・高校生―

松村　波さん(東京大学教育学部付属中等教育学校)

都立練馬高等学校

順天高等学校・中学校

都立新宿山吹高等学校

東京女学館高等学校・中学校

―大学生―

末永　新さん(埼玉大学)

坂　真那美さん(実践女子大学)

薄井　雅弥さん(首都大学東京)

谷村　一成さん(中央大学)

鈴木　安梨沙さん(明星大学)

内容

1）中学・高校生発表

①村松さんからは、「一緒に活動する仲間が欲しい」意見と個人での参加を希望している受け入れ側との意見の食い違いが悩みということでした。

②練馬高校からは、昨年の分科会で得た情報を活用した活動などの発表がありました。また活動のマンネリ化、部員不足が悩みということでした。

③順天高校からは、活動のモットーの発表がありました。悩みとして募金活動は呼びかけやポスターの工夫が必要とのことでした。

④新宿山吹高校からは、「スープの会」などの発表がありました。ホームレスの方との接し方などが悩みということでした。

⑤東京女学館高校からは、フィリピンでの活動報告がありました。部活のマンネリ化・部員不足・発表の機会が少ないことが悩みとのことでした。

2）大学生発表

①末永さんからは、自身の中学時代の東日本大震災での被災の経験から、被災地支援などの発表がありました。被災地支援を行っています。

②坂さんからは、東日本大震災の復興ボランティアについての発表がありました。企画から実際の活動まで行っています。

③薄井さんからは、ボランティアを推進するゆるキャラなどの発表がありました。たくさんの失敗から、それを生かして現在も活動をしています。

④谷村さんからは、中央大学変人学部についての発表がありました。大学生向けに大学生活の選択肢を示す活動などを行っています。

⑤鈴木さんからは、防犯の啓蒙活動や防災、被災地支援活動などの発表がありました。振り込め詐欺の寸劇・駅前の啓蒙活動などを行っています。

3）グループワークⅠ　【自己紹介、発表の補足・感想等】

グループに分かれ、グループリーダーを中心に「TOCAS」を用いてアイスブレイクを行いました。その後、発表についての感想等について話しました。

4）グループワークⅡ　【以下のテーマについての話し合い】

・1万円でできるボランティア活動

（1万円でできるボランティアを考える）

・ボランティアに興味をもってもらうためのボランティア

（ボランティアに興味を持ってもらうために後方の仕方などを考える）

・「こんなボランティアしてみたい」

（やってみたいボランティアを自由に考える）

成果と課題

中・高生と大学生、一般の大人（先生含む）の方というように年齢層でグループを組んだため、グループワークがしやすかったです。TOCASを用いたアイスブレイクもしっかりできて、各グループでそれぞれのボランティア活動の計画を立てることができたと思います。グループごとに全く異なる視点の考え方があり面白いグループワークでした。今回考えたこのボランティア活動を実際に実行していくことが次の課題となります。

企画・運営

小野　育実（明星大学）【主担当】

土屋　弦（明治大学）

小野　明子（東京ボランティア・市民活動センター）

塙　大輝（順天高校）

高村　浩美(順天高校)【報告書】

8　学校と地域をつなぐ 2.5th プレイス「高校内居場所カフェ」

開催目的

学校（2nd プレイス）と地域（3rd プレイス）をつなぐ「2.5th プレイス」として、全国で少しずつ広がっている「高校内居場所カフェ」。各高校の取り組みから、子どもたちが多様な人びとと出会い、それぞれの居場所を増やしていけるような場の役割、学校が地域に開かれ、人と人とをつなぐ場となっていく可能性、このような取り組みが行われている地域が持つ力について考えます。

開催日時

2 月 11 日（土）14:00～16:30

参加者数

34 名（参加者 25 名、出演者 3 名、スタッフ 6 名）

出演者

石井　正宏さん（NPO 法人パノラマ 理事長）

ひきこもり等の若者を支援する NPO 法人で活動後、ひきこもりにさせない予防支援に取り組むため、平成 21 年に（株）シェアするココロを設立。平成 27 年に NPO 法人パノラマを設立し、課題集中高校での有給職業体験プログラム「バイターン」や高校内居場所カフェ等の支援を行う。
平成 25～27 年度神奈川県立田奈高等学校学校評議員。

尾崎　万里奈さん（公益財団法人よこはまユース）

青少年施設での「居場所づくり」や、地域の青少年育成活動の支援に携わる。
平成 28 年度 10 月から横浜市立横浜総合高校で「ようこそカフェ」をスタート。

金澤　信之さん（神奈川県立田奈高等学校 キャリア支援グループ 総括教諭）

教職員組合の諮問委員として、学区・入試制度などの提言作りに参加。複数の困難を抱える生徒への支援、中退防止、就労支援、「バイターン」事業などを実施するにあたり、さまざまな外部資源や人材を高校に導入し、卒業後も継続する新たなキャリア支の枠組み作りに取り組んでいる。

内容・成果と課題

（1）金澤 信之さんからの発表

- 子どもの相対的貧困率が 16.3%とされる中、神奈川県では学区がなくなり、全県からさまざまな困難を抱えた子どもたちが「課題集中校」に集まってきています。「課題集中校」では、ひとり親世帯や生活保護世帯、発達障害のある子どもの割合が高く、さらに生活困窮の課題、家庭の崩壊など、困難は重層化しています。
- 学校では、困難を可視化して、その生徒にとって最適な支援は何かを常に考えています。学校全体で包摂的な支援をしていき、最後は社会への接続として、キャリア支援につなげていくことが重要です。

・そのために、学校や大人への信頼感を増やしていく仕掛けの一つが、居場所があり、食事ができ、文化的シャワーを浴びられて、相談もできる場である「高校内居場所カフェ」です。結果、退学率、進路未決定率は減少していっています。

（2）石井 正宏さんからの発表

・ひきこもり者の支援を続けてきた中で、予防支援の重要性を感じ、限られた予算で支援の選択と集中をするなら、ハイティーンの教育と雇用の接続支援を行うことが重要と考えています。

・スティグマ（恥辱）を生まない（＝誰もが利用できる）支援をしなければ、困難を抱える子どもたちには出会えません。学校の中のアウトリーチとして、居場所カフェの形態につながりました。

・「交流相談」では、個別相談と違い、子ども自身に相談するという意識がなくても、相談員と出会い、雑談する中で自身の課題を語り出すことができます。「困った生徒は困っている生徒」です。その生徒を発見し、潜在的な課題にも対応していけることが、居場所カフェの一番の意義です。

・地域（3rd プレイス）にコミュニティを持てていない子どもたちは、退学や進路未決定等で学校（2nd プレイス）への所属を失った途端に、家（1st プレイス）しかなくなり、社会から排除されていきます。2nd プレイスと 3rd プレイスをつなぐのが、高校内居場所カフェ（2.5th プレイス）の役割です。

・日ごろ、親と先生以外の大人に出会うことのない子どもたちが、地域からくるボランティアなどに学校の中で出会い、地域につながっていくことで、子どもたちの自立の可能性を広げていきたいと考えています。

（3）尾崎 万里奈さんからの発表

・横浜市立横浜総合高校では、校長や進路指導部を中心とした高校側の全面的な協力体制、大学・NPO 法人との連携があり、「ようこそカフェ」が立ち上がりました

・生徒の多くは周囲に相談できる相手がおらず、「居場所」や「人との交流」を求めています。
カフェは子どもたちにとって「居場所」＋「相談の場」となっています。そこでの出会いや交流を通して「自分たちが大切にされている」という感覚を得られることが、その後の社会的・職業的自立に向けた力を育んでいくと思います。

（4）参加者からの質問

●外部の人たちが学校内に入ってくることについて、学校側や教員たちの反応は？

（金澤）外部の人たちが学校内に入ってくることが難しい状況は変わっていません。課題の多い生徒たちに向き合うには、全力で生徒を支援しようとする教員でならなければいけないと思いますが、一方でそういった教員は、全部を自分自身で何とかしようとがんばってしまうという側面があります。そのようなモチベーションのある教員に食い込んでいきながら、外部とつながることで何ができるのか、どんな効果があがったのかを見える化していくことが重要です。
外部から入ってきた支援者が、教員が経験したことのないような支援を行い、困難事例を解決していくという地道な実績を積み重ねていくことで、徐々に、協力し合いながら子どもたちを社会に送り出していこうという教員との信頼関係が生まれていきます。
課題は、教員と外部の人たちとの間に入り、つなぐ教員が必要なことだと考えています。

●卒業後の子どもたちの住居支援について

（金澤）家族のもとで暮らすことが子どもにとってよいとは言えず、子ども自身で部屋を借りなければならない場合があります。地域の不動産業者の集まりで教員がその話をし、高校と住居支援の

協定を結ぶ仕組みを作りました。地域との信頼関係ができ、地域の人びとと一体になって生徒を支える仕組みを作ったことで、住居支援がうまくまわり始めています。

●今後の「高校内居場所カフェ」は？

（尾崎）続けていくことは難しいですが、学校の中に居場所があり、その居場所に相談できる機能が合わさっているという仕組みが、どの学校にもできるといいと思います。

（金澤）持続的で、存在感を持った場所、食べ物や飲み物もあり、安心・安定できる場所として、どの学校にも標準的に置かれるようになればいいと思います。生徒の学校への定着支援として効果的であるということが認識され、施策となっていくことが重要だと考えています。

（石井）カフェは、富の再分配、機会の再提供、文化的資本の提供の場であると思います。予防支援は、子どもたちの10年後、20年後の未来を決めていくもの。現在、予防支援の成果指標を作成しているところですが、全国の居場所カフェの成果を、今後アドボカシー（政策提言）として訴えていきながら、単年度予算ではない正しい予算のつけ方も含めて慎重に進め、安定的な運営を実現していきたいと思います。

（5）企画者より

日ごろ、地域で生活困窮者の相談支援をしている中で、学校は、外部からなかなか入っていけない場、つながりにくい場だと感じています。一方で、力を持っている場だとも思います。学校が包括的で、子どもたちがさまざまな信頼に足る人たちと出会える、つながれる場であれば、それが子どもたちの将来を、これからの自立を支えていくのではないかと思い、この分科会を企画しました。
今後、この取り組みの成果が正しく評価され、一般的なものとして社会に浸透していく中で、現在、高いと感じている学校との壁も低くなっていくのではないかと期待しています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 子どもたちが話しやすい環境を整えることがとても重要だと感じた。その中に居場所ができるのだと思った。
- 地域との関わりが重要になってくるだろうと思っていた中、実際に、上手く地域とのつながりを作って子どもを育てている事例が知れてよかった。
- 教育現場で、このような取り組みに理解を示してもらえるような土壌を、たくさん作っていきたいと思った。
- 私も子どもの力を信じて、微力でも支援できたらと思った。
- 日本の高校に2.5thプレイスがあれば、高校が変わる。

企画・運営

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）【主担当・報告書】

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）

髙橋　紘之（東京ボランティア・市民活動センター）

9　遠いようで近い社会２
～私たちの暮らしに引きつけて考えてみよう～

開催目的

私たちの知らないことは、暮らしの中にはたくさんあります。10代20代の若者たちが、様々な問題を抱えながら風俗店などで働いており、SOSを誰にも出せないところまで追い込まれる、その実態を知っていますか？特別なことと思われがちですが、本当にそうでしょうか。この分科会では、私たちの身近なこととしてその問題について参加者の皆さんとともに考えてみたいと思います。

開催日時

２月11日（土）14:00～16:30

参加者数

25名（参加者19名、出演者２名、スタッフ４名）

出演者

荒井　佑介さん（NPO法人PIECES理事）

佐藤　初美さん（NPO法人10代・20代の妊娠SOS新宿ーキッズ&ファミリー代表理事）

内容・成果と課題

分科会No.23「遠いようで近い社会１～現場から考えてみよう～」との連動企画という位置付けで企画しました。前夜にはワークショップとして、風俗店で働く若年層の実情、実際に働く人やその人のセカンドキャリアを支える人などのお話を伺いましたが、本分科会では、まずはそこへ参加した方々の報告、感想などを話していただきました。大まかな進行としては、風俗店で働いた経験があるが、地域での暮らしをしていこうとしている若者を地域の人たちを巻き込んで支援している団体の方、そして、望まない妊娠をしてしまった若者の相談支援業務を行っている団体の方にいらしていただき、その実情、活動の内容、課題などを、事例を交えながらお話いただきました。その後、グループに分かれて参加者同士で、お二人のお話を聞いての感想や、地域の人として何ができるかを話し合いました。

ONPO法人10代・20代の妊娠SOS新宿ーキッズ&ファミリー　代表理事佐藤氏から。

相談業務を１２月から開始したが、２月の段階で、述べ約230件のメールでの相談が入っている、とのこと。如何に悩んでいる若者が多いかがよくわかります。当の若者は、ショートメールでの相談が100%であり、そのメールを交わしながら信頼関係を築いていくしか方法がない、と、佐藤さんはおっしゃいます。若者たちは幼い時からの親子関係の希薄、或いは虐待やネグレクトなどの劣悪な家庭状況、さらに地域の人から声もかけられた経験もないなど地域との関係も希薄であることから、家出を繰り返し、心を病み、相談できる人もいないまま、特に新宿では歌舞伎町などをウロウロしているうちに風俗店へ導かれていく事例も多いとのこと。様々な体験から親も行政も信用しておらず、まずは関係づくりを考えること、そして、性の正しい知識を伝えることが精一杯だが、そこから始めるしか手立てがないほどに孤立をしてしまっているのが実情。しかし、それは、地域で暮らしている私たちにはなかなか見えてこないことである、だからこそ、地域の大人として、子どもたちへどんどん声をかけてほしいと、熱く語られました。

ONPO 法人 PIECES　理事荒井氏から。

ホームレス状態支援などの経験もあり、その活動の中で、同年代の路上生活者に出会ったこともあるとおっしゃいます。学生時代から、不登校や引きこもりの子どもが身近にいつもいて、一緒に過ごす時間が多かったと語られていました。そして、どの子どもも、そして大人も、皆幼少時の育ちに課題があると感じている、とのことでした。NPO 法人 PIECES では、小中学生の学習支援を中心に行ってきていますが、高校生以上の支援の必要性も感じ、それぞれの子どもに寄り添う人材（コミュニティーユースワーカー）の育成も目指しているそうです。そのコミュニティーユースワーカーが、支援を必要とする子どもや大人にも、常に寄り添いながら地域の人たちとつなげていく、という作業をしていきます。進路のサポート、不登校支援から、子育て支援、若いパパ、ママなど、活動は多岐に渡りますが、その子（人）のニードに応じたものをオーダーメイドで作っていく、ということでした。今は居場所スペースも運営を開始。そこに地域の人にも関わってもらえるような場づくりを行っていきたい、と語っていました。

グループ討議。

まずは感想を、そして、自分たちにはできることがあるのか、という内容を話し合っていただきました。各グループからは、地域で支えるのは難しいのではないか、と、消極的な意見も出る一方、まずは人を育て地域を育てるなどの体制作りが必要なのでは、という意見、また、それぞれの活動、取り組みを情報発信し、周囲に知ってもらうことも必要、また、地域、人のつながりをまずは見直さなくては、或いは、多様な暮らしや背景の方々が地域には住んでいるので、そこに向き合うことも大切、などの意見も出ていました。

企画者としては、お二人の出演者のお話は、事例も含め、大変深刻なものではあったが、参加者に少しでも現場を知っていただき、自分たちの地域や暮らし方を見つめ直してみようという思いや関心を持っていただけたので、概ね分科会の目的は達成したと考えている。

出演者の「人、場、地域、社会、趣味。なんでもいいから、依存先をたくさん作ることが大切。」「いろいろな大人につなげるとともに、大人もつなげる」、という言葉が大変印象に残りました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 知らない子どもたち・保護者たちの現状を知ることができました。自分も何かしらのかたちで関わり、サポートしていけたらと思います。
- 現場で活動している人の話がいけてよかった。いろんな人が、関心を持ってムリなくできることをやったら、自然と支援のネットワークができて、必要な人がアクセスできる仕組みが出来上がっていた！みたいな未来に近づけたような気持になれた。
- 様々な立場の人の話を聞くことができた。どうしたら現状を改善していけるか常に考え続けたいと思う。

企画・運営

飯倉　聖子（NPO 法人みんなのおうち）【主担当・報告書】

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

１０　ろう文化を話し合おう！

開催目的

聴覚障がい者の中でろう者と言われる方々には文化があるといわれていますが、一般的には知られていません。例えば手話通訳を学ぶ過程でも触れることは殆どなく、手話を学んだ人にも行動や考え方が理解されないことがあります。そもそも、ろう者の文化とは何か、理解されないこととは？当事者を中心に話し合い、ろう者の理解促進につなげる布石にします。

開催日時

２月１１日（土）14:00～16:00

参加者数

１３名（参加者８名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

伊佐治正幸さん（株式会社リコー／リコー手話サークル講師）

内容・成果と課題

当初はろう者を中心に、健聴者との隔たりに焦点を当てた時に、自身が感じる「ろう文化」とは何かを洗い出してもらい、課題の整理等を行う予定でしたが、ろう者の参加者が少なかったことと、このテーマに関心のある健聴者の参加者が多かったことから、双方の立場で「ろう文化」とは何かを話し合ってもらった。お互いに腹蔵なく感じていることを発表しあい、どのように歩み寄るか、隔たりをなくすことができるかを一緒に話し合ってもらった。成果としては、健聴者が感じるろう者の考え方に戸惑いを感じることなどを率直に聞けたことが、ろう者にとってはとても新鮮で、お互いにどう感じているかがわかり、課題の整理につながったと感じた。また、今回明らかになった課題としては、当事者にとって「ろう文化」とはごく当たり前のことで、改めて考えるということに関し、あまり関心を示さないということがわかり、それが健聴者との隔たりにつながっていると想像しにくいことから、ろう者の参加が少ないのではないかということがわかった。この結果を踏まえ、４月初旬に設定している単独の企画につなげていきたいと思う。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ろう文化について理解が深まり、ろう者の方々の実感に基づく意見をうかがえ、とても貴重な時間を過ごせました。
- ろう者と席を同じくして話し合いができると思っていたが違った。
- ろう者と聴者が分かれた形で進行されていましたが、もう少し交流ができたらよかった。

企画・運営

高橋　義博（調布市市民活動支援センター）【主担当・報告書】

徳堂　泰作（NPO 法人日本ソーシャルフットボール協会）

熊谷　紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

１１　最近の若者事情からボランティアの受け入れを考える

開催目的

地域から若者に寄せられる期待の多くは、自ら積極的に動ける“スーパーマン”的な人物。一方、VCを訪ねる若者の中には、コミュニケーションが少し苦手、自分に自信がない…など“スーパーじゃない”若者も少なくないのが現状です。ただ、彼らだって、ちょっとしたきっかけで大きく変化・成長する可能性を秘めています。この分科会では、“スーパーじゃない”彼らのことを知ったうえで、力を引き出し、育てる受け入れについて一緒に考えます。

開催日時

２月１１日（土）14:00～16:30

参加者数

36 名（参加者 31 名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

西川 正さん（NPO 法人ハンズオン！埼玉 常務理事／埼玉大学 非常勤講師）

内容・成果と課題

○挨拶・趣旨説明・講師紹介等（10 分）

○グループごとに自己紹介（30 分）

（1）名前、所属

（2）今日の分科会で聞きたいこと（期待すること・悩みなど）

○若者事情紹介～送り出す大学側から（40 分）

大学 VC のコーディネーターから、“スーパーではない”が“たくさんの可能性を秘めている”大学生の様子や送り出しにあたっての悩みを紹介し、参加者と共有した。（以下、一部）

- 平日は授業、週末はサークルやアルバイト、インターンなどで忙しい学生が多く、少なくとも１ヶ月前には予定を伝えないと調整が難しい。
- 携帯電話や SNS の普及に伴い、メールに件名や名前を書かない学生や、電話の苦手な学生が増えている。
- 活動中や打合せ中などに携帯電話をいじるのは、単に何をすべきか分からず手持ち無沙汰な場合や、メモやスケジュール管理に使用している場合もある。
- 新入生同士が入学前から SNS でつながるなど、一人になりたくない、居場所を求める傾向が強い。

○若者事情紹介～受け入れる団体側から（40 分）

大学生を受け入れている団体のスタッフから、受け入れに関するエピソードや日頃の工夫、心がけなどを紹介した。（以下、一部）

- 活動するうえで必要であれば叱ることもある。その際は人間性に対してではなく、起こったこと・事実に対して叱るようにしている。

・学生がまた会いたい、話したいと思うような信頼関係を築く。

・学生はそれぞれに何かを求めてやってくる。それにどう応えられるか、寄り添い考えながら受け入れている。

・わからないことがあったら聞けるよう、受入担当を必ず一人つける。その際、学生との相性を見て、誰を担当にするか決める。団体として受け入れ対応をする。

・どんな子かを受入前に教えてもらうなど、大学側・受入側が連携していけるといいのではないか。

○グループワーク（20分）

（1）感想、印象に残ったこと

（2）今後自分の団体で取り組みたいこと

○全体共有・まとめ（20分）

各グループで話したことや、特に印象に残ったことを、全体で共有した。

・スーパーマンじゃない方が可能性が無限にあると感じた。

・自分にとって当たり前のことも相手にとってはそうでないかもしれない。こうあってほしい、という思いを持って伝えると相手への響き方も違うのではないか。

・特性を理解し根気よく声をかけ続け、信頼してもらえる関係性をつくっていきたい。

・何かを求めている、何かをやりたいという若者の気持ちを受け止め伝えていきたい。

参加者の声（アンケート結果などから）

・若者事情を聞いて、どこも悩んでいることは同じだと分かりました。受入れ側、中間支援組織の意識の持ちようで、まだ改善できることが分かりました。

・今の若者事情を知った上でのアプローチはとても勉強になった。怒り方・注意の仕方にしても、信頼関係を作った上でうまく対応出来ればと思った。

・親としても、団体としても、考えさせられた。寄り添う、一緒にやる。

・若者に「また来たい」と思って頂けるように、楽しいということを、遊び心を持って伝えていきたい。

企画・運営

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当】

直井　友樹（NPO法人NICE）

長瀬　健太郎（NPO法人good!）

和田　更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）【報告書】

２４　差別を乗りこえる力　国立ハンセン病資料館を見学

開催目的

有史以来全世界で差別の対象とされてきたハンセン病（らい病）。日本でも「らい予防法」で完全隔離政策がとられ人権を迫害してきた歴史があります。その隔離施設であった東京都東村山市の国立多摩療養所全生園に併設される資料館を見学し、長い間ハンセン病に対する差別と関わってこられた専門家のお話を聞いて差別とは何か、差別を乗りこえるためにはどうすればいいかを考える場としたいと考えました。

開催日時

２月１１日（土）13:00～15:30

参加者数

21 名（参加者 14 名、出演者２名、スタッフ５名）

出演者

成田　稔さん（国立ハンセン病資料館　館長）

西浦　直子さん（国立ハンセン病資料館　主任学芸員）

内容

【内容】

・参加者は各自資料館に集合し、簡単なオリエンテーションを行って、まず国立ハンセン病資料館主任学芸員西浦直子さんの解説を聞きながら約１時間資料館を見学した。見学の最後に質疑応答を行い、10分ほどの休憩の後資料館の映像ホールに移動して、資料館館長でハンセン病の差別に関する世界的権威でもある成田稔先生の講演を聞いた。講演は「日本の過去におけるハンセン病（癩、らい）対策から学ぶ」というタイトルで、日本で最初にハンセン病が認識されたのはいつごろかという歴史からなぜ完全隔離政策がとられるようになったか、また、具体的にどのような差別が行われたかという内容が話された。講演後参加者からの質疑応答を通して本分科会を振り返り、15：30 ごろに終了した。

【成果】

・資料館を見学したり講演を聞くことでハンセン病とはどのような病であるかを認識することができた。

・「らい予防法」は撤廃されたが、ハンセン病が過去のものではなく現在の日本においても多数の患者が存在し、そして政策や法律として公的に行われた差別が現在も継続されていることを知った。

・ハンセン病に対する差別を学ぶことによって現在の社会における差別を引き起こしているものは何かという根源的な課題を考えることにつながった。また、いったん行われた差別を解消することの困難さを知ることできた。

・ハンセン病患者自身がいかに差別と闘い、その差別を乗りこえて生きてきたかという現実に触れることによって、社会に存在する差別と向き合うことの大切さを考えることができた

【課題】

・もっと多くの市民がハンセン病に対する差別の歴史を知り、現在の社会における差別の持つ怖さや、他人事ではなく自らの課題として感じることに必要性を実感した。

・公的な差別という過ちを繰り返さないためにも、学校教育や社会教育などの場面でハンセン病に関する差別を伝えることが重要であり、現在進行形でもあるアジアやアフリカなどへのハンセン病に関するスタディツアーなども実施が求められるのではないかと感じた。

参加者の声（アンケートの結果などから）

・東日本大震災における福島の原発事故被災者に対する差別は、ハンセン病患者に対して多くの人が感じていた差別意識につながるものがあるのではないかと思った。

・成田先生のお話の中で「あなたたちも差別の片棒を担いできた」といわれた時にはショックを受け冷や汗が出ました。

・ハンセン病が特別な病ではなく、今では治療によって完治する普通の病気であることを知りました。このことを一人でも多くの人に伝えなければと思いました。

・差別について考える「きっかけ」を頂けました。（入口に立つことができたと思います）

企画・運営

枝見　太朗（一般財団法人富士福祉事業団）【主担当・報告書】

中川　径治（昭和電装株式会社）

二瓶　良恵（中野ボランティアセンター）

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

１２　交流会

開催目的

「暮らしの中から動きだす、創りだす。」をテーマにした交流会とし、２日目までの分科会を振り返るとともに、ボランタリーフォーラムに参加したみなさんと、新たな出会いや交流を深める場としました。

開催日時

２月１１日（土）17:00～18:30

参加者数

68 名

内容・成果と課題

１．内容

アイスブレイクを兼ねてグループ分けのゲームを最初に行い、様々なメンバーと交流ができるよう企画しました。グループ内での自己紹介や交流の後は、１日目と２日目の分科会の１分報告会を実施し、他の分科会でどのようなことをしたのか、知ってもらう機会としました。報告会のあとは、改めてグループ替えを行い、多くの方と交流できるようした。交流の後は、３日目の分科会の告知を実施し、明日に繋げる時間をとりました。司会は小野育美（明星大学）と杉村郁雄（日本ファシリテーション協会）が担当しました。

２．成果と課題

＜成果＞

・ゲームにより、グループ作りを行った結果、様々な方同士の交流と分科会の情報交換の場になった。

・報告会と告知タイムを実施したこともあり、分科会全体を知ってもらう機会となりました。

＜課題＞

・1.5 時間という時間が少し短く、じっくりお互い話す時間がとりづらかったです。

・アルコールが入っていることもあり、司会者の話が伝わりにくい場面もありました。

今後の方向性

・アルコールなしで、交流をメインとした場にすることも検討したいです。

・会場の広さはあるものの、もう少し多くの方に参加できるように仕掛けや広報を検討したいです。

参加者の声（アンケート結果などから）

・分科会に出ていた人との談笑ができたので良かった。

・もう少し時間を。

・酒が入ると、思考があやふやになり、予定通りの展開にならないのではないかと思います。

・進行は良かった。アルコールはいらない。

・ゲームのおかげで、色んな人と話せました。

・私は対人恐怖があり、今までの交流会で話す人がいない時がありました。交流会に出る前は不安でしたが、今回のような企画があると助かります。今後もこのような企画を続けてほしいです。

企画・運営

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

小野　育美（明星大学）

後藤　浩二（スープの会）

髙橋　沙織（みたかボランティア・センター）

直井　友樹（NPO 法人 NICE）

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）【報告書】

岡部　沙耶（東京ボランティア・市民活動センター）

１３　地域でともに暮らす
～施設の活動から考える私たちの地域～

開催目的

私たちが住む地域には乳児院、児童養護施設、障がい者支援施設などさまざまな施設がありますが、日常では接点が少なく、よく知らない、関わりがないという現状があります。本分科会では、施設の方から、日々の活動や地域での取り組み事例をうかがい、どうすればともに支え合う地域をつくることができるか、参加者と一緒に考えることを目的としています。

開催日時

２月１２日（日）10:00～12:30

参加者数

29 名（参加者 20 名、出演者２名、スタッフ７名）

出演者

金親　浩一さん（社会福祉法人 新宿区立障害者福祉協会）

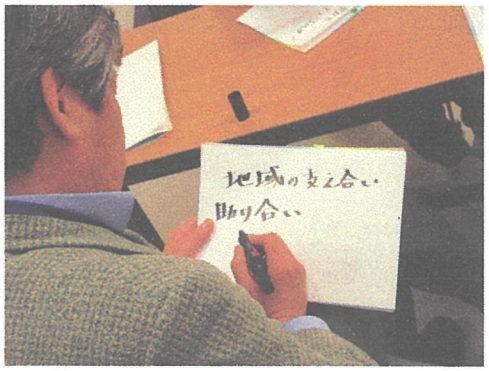
西川　祐子さん（社会福祉法人 聖友ホーム）

内容・成果と課題

１．論点

私たちが暮らす地域には乳児院、児童養護施設、障害者施設など様々な施設があります。本来は施設に入居される方の特性からも地域全体で支えていくことが望ましいですが、その存在自体をよく知らない、接点がないというのが現状です。この分科会では、これらの背景を踏まえて、①どうすれば施設の存在を知り、理解してもらえるか、②どうすれば施設とのつながりを持てるのかをテーマに出演者とともに話を進めました。

２．議論の内容



出演者の金親さんからは、挨拶から始まった食事ボランティアの事例、地域の防災訓練や盆踊りなど地域のイベントに積極的に参加した事例、地元社協からのつながりで落語家や演奏家などに来てもらった事例、施設に入居者に本物を体験して欲しいという思いから、スターバックスに来てもらい本物さながらのカフェ空間を作り出した事例など、地域とのつながり事例を数多く話していただきました。

もう一人の出演者である西川さんからは、施設に関わってもらっているボランティアの事例、施設の中庭を年に１度開放して、露店を開きお祭りをしている事例、地元商店街の「ゆうやけ市」での出店事例、阿佐ヶ谷ジャズストリートでは施設の一部を開放した事例などを話していただきました。一方で、乳児院、児童養護施設という特性からボランティアが関わりにくいことについてもお話いただきました。

参加者からは、数多くの質問が出て、出演者や参加者から回答していただきました。

・スターバックスに来てもらうためどうすればいいのか。

・プライバシーや情報公開で悩んだことはあるか。

・どうすれば地域とつながりをもてるのか。

・地域の方にどのような意識を持って欲しいか

・分科会参加者で、地域とつながりを意識している人はいるか。

・気楽にボランティアをすることができないか。

・働いていて感動したことや苦労したことは。など

3．成果

主体性の第１歩でもある質問や感想が数多く出たことは、施設の活動を知ってもらう、関心をもってもらうという意味において実りのある分科会となりました。また、施設はできる限り知られたくない、自分たちで独自で活動をするという背景もある中で、出演者から施設も地域に積極的に出て、つながりを作っているという話に触れられたことは参加者にとっても成果のある内容となった。

4．今後の方向性

参加者の感想や分科会の話の中でも、施設の様々な活動を知らなかったという声が多く、今回は広く参加者を募ったが、施設を運営されている方や運営などに関わっている方を対象に、場を設けることも検討してきたい。

参加者の声（アンケート結果などから）

・普段なら絶対に目を向けない問題や、考えつかないことをたくさん聞けました。地域ってなんだろう？と考えたことがなくとても新鮮な気持ちでした。お互いのつながりなどで、普段の生活の中でも活かせることがたくさんありました。来てよかったと思いました。

・地域と施設のつながりはとても必要な物にも関わらず、理解が得られない、機会がないなど、様々な理由でつながる難しさを感じていました。地域と施設がつながる取り組み、どのような意識や関わりを持つことが大切なのか、お聞きすることができ、良かったです。改めて、地域の関わりについて考えていきたいと思いました。

・話し手のお二人のお話はとても興味があり、発見！がありました。一方で、参加者が少ないことと、参加者の幅が狭いことが、勿体ないと思いました。専門的な人が多いので、もっと、若者や一個人（市民）が、多く参加できた方がより良いアイデアが生まれると思いました。熱意のある人、知人が参加している人が多く、休日にちょっと参加してみようかな、というラフなフォーラムがあってもいいのでは？と感じました。

・地域とのつながりを大切にする施設の方々と話ができて良かったです。プライバシー保護も大事ですが、やりすぎも良くない…難しいですね。

企画・運営

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）【主担当・報告書】

酒井　玲奈（保育力研究所（キッチン図鑑））

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）

鈴木　正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

小原　恵美（やのくち正吉苑）

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

１４　社会をよくする市民力～今こそ草の根！？～

開催目的

１人の想いが周りを動かし、市民の力が動くとき社会も動く。そのような「草の根」の活動を通して、より良い社会が作られてきた歴史があります。社会変化に伴って、多くの人が生きづらさを抱える今だからこそ、他の誰でもない自分たち自身が生きやすい社会を作っていく意味を考えたいと思いました。本分科会では、これまでの「草の根」活動が時代背景に合わせてどのように変化してきたのか、その核となる部分は何かを伺った後、自分の身近な疑問をそのままにせず、発信し、仲間を見つけ、新しい活動につなげた事例紹介を行いました。それらを通して、「草の根」的活動が特別な事ではなく、自分たちの暮らしから生まれるものであることを理解し、参加者同士で感じている疑問を話しあうことで、一歩を踏み出すきっかけになれば、と企画しました。

開催日時

２月１２日（日）10:00～12:30

参加者数

27 名（参加者 19 名、出演者３名、スタッフ５名）

出演者

藤原　孝公さん（NPO 法人 VCAS ボランティア史研究会）

北畠　拓也さん（ARCH　共同代表）

朝倉　さくらさん（いたばしアレルギーの会　代表）

内容・成果と課題

1950 年代からの市民活動の歴史を振り返るところから本分科会は始まりました。当時は労働運動の要素が強く、1970 年～80 年代になって市民参加が増えてきました。2000 年代に入ると、「保守草の根」と言われるような運動も出現し、社会変化に伴い、今後草の根はどこに向かうのでしょうか。そんな今だからこそ、これまでの草の根運動を振り返り、その時どんな人に会って、何を感じたのか、その想いを残すことが必要だという話しがありました。

【事例発表】

1. ARCH の東京ストリートカウント
   - 都市計画、まちづくりを大学で研究する中、2020 年を契機に「優しい都市」を目指すためにホームレス問題についてのアドボカシー&研究を目的に設立。
   - 「ホームレス状態」が存在する時に、みんながそれを自分たちの問題と考え、その状態をなくすために働きかけ続ける社会を目指す。
   - 行政ではできない夜間のホームレスカウントを行っている。学生だけでなく、支援者、社会人など多様な人の参加が増え、ホームレスを身近に考えてもらえるきっかけになっている。
2. いたばしアレルギーの会

・自分の子どもが重度のアレルギーで、ようやく辿りついた専門医の下で出会った同じ境遇のママ達と情報交換をするところから活動が始まった。

・東日本大震災を受け、「防災」と「食育」を柱に学習を始め、そこで初めてアレルギーを持たない人たちと仲間になることができた。

・人に伝わる言葉を持つ必要がある。「〇〇がダメ」から「〇〇なら食べられる」に変えただけで、周りの人たちも変わってきた。今は楽しくてしょうがない。

草の根の歴史、事例報告を受けて、グループで自分たちの関心事を話しあってもらいました。その中から、共通のテーマを見つけ、具体的な次の一歩を考える事を企画していましたが、なかなか共通テーマが難しく、議論を深めることが出来なかったのが残念でした。各グループがテーマとしてあげたのは、①活動とお金、②ボランティアとは何？、③災害、④参加と主体性。どれも興味深いテーマでした。グループワークの進め方については課題が残りましたが、各グループとも多様な視点で活発な意見交換がされていました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・自分が動き出すきっかけをもらえると思って参加しました。期待どおりでした。

・多くのキーワードが見つけられました。地域に根付く小さなボランティアを見つけたい。

・こうした会を通して、市民から動こうとする多くの人たちが関わり、ノウハウ（？）や考えを共有することの大切さを改めて感じました。そうした市民の広く、厚い層ができていく事を期待しています。

・活動のきっかけが２団体の話から分かりました。シンプルな共感できる言葉が大切ですね。

企画・運営

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】

飯倉　聖子（NPO 法人みんなのおうち）

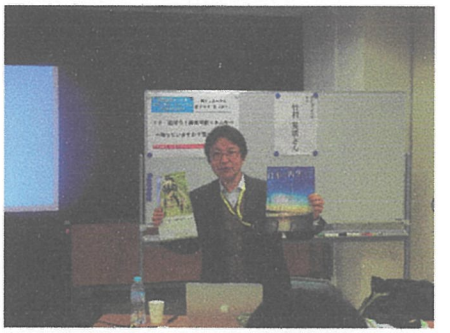
１５　選ぼう！再生可能エネルギー
～知っていますか？電力自由化～

開催目的

2016年４月から「電力自由化」がスタートし、電気の小売が自由化され、どの電力会社からでも電気を選べるようになりました。これまで独占されてきた電気事業の市場が開放されたことで、料金の値下げが期待されるとともに、再生可能エネルギーを市民が選択することも可能になったのです。この分科会では、電力自由化の意義や可能性、また、課題について考えます。

開催日時

２月12日（日）10:00～12:30



参加者数

16名（分科会参加者８名、出演者１名、スタッフ７名）

出演者

竹村　英明さん（市民電力連絡会 理事長）

内容・成果と課題

1)電力自由化とは

現在、電力自由化の本来の姿からはほど遠い状態です。自由化の本質は、「発電・送配電・小売の三分割」。元々はこれが全部一つの会社に入っていました。発電も、小売も競争を入れて価格を下げるということが、本来の自由化の目的です。ただ送配電事業については、送電線は簡単に造れないので既存の送電網を使わなければなりません。現在、東京電力で言えば、発電、送配電、小売に分割しましたが、東京電力ホールディングスという持ち株会社があって、三つの会社を所有しています。これは、本来の自由化と相反するものです。2020年に完全三分割しなければなりません。

電力自由化の背景には、巨大化、発電・送配電・小売一体、地域独占の３つの弊害があります。巨大化は、大きな発電所が停止する影響は大きいので、停電させてはいけないと、万が一のために、同等規模の発電所をつくるという弊害。日本の発電所の総発電容量は2.8億kWくらいありますが、実際に使うのは、ピーク時で1.6億kWくらい。巨大な無駄で、巨大故に災害に対しては脆弱です。

そして、９つの電力会社がそのエリアを支配して、他社は入れない仕組みになっていたので、競争がない。それだけでなく、地域の経済界を支配しています。その原因は、「総括原価方式」です。自分達が使うあらゆる経費が総括原価。普通の企業は、経費を切り詰め利益を増やします。しかし、総括原価方式では、経費の3%が利益となります。つまり、できるだけ経費を大きくした方が、利益が多くなるので、無駄をした方が儲かるのです。これが諸悪の根源で、だから巨大化します。仕事を受注する経済界も、高い値段で受注してくれるので、こんなにいいお客さんはいません。支配されてしまいます。発電と小売の総括原価方式は廃止となりましたが、送配電については半公共的な事業だからと残されてしまいました。

2)電力自由化は進んでいないの？

自由化は実はすごく進んでいます。電気の契約には特別高圧、高圧、低圧の３つがあります。特別高圧は、大工場等大量の電気を使う契約で、非常に安く、新電力が参入するのは難しい。高圧はビル等、低圧よりかなり安い契約で主戦場です。一番契約量が多く、日本の半分程度。低圧は４割くらい。

高圧では、東電、関電管内ともそれぞれ２割は新電力に客を取られています。一般家庭は確かにまだ2.2%ですが、まだ１年経っていません。ちなみに、ドイツでは１年目１%強です。高圧が２割に達しているのは、自由化が2000年から始まっているからです。

新電力は300社以上あります。上位20社には、自治体や市民が作った小売会社はとても入っていません。１位のエネットは断トツでシェア20%。これでも日本全体の電力需要からすると１%、新電力全部合わせてもせいぜい5～6%です。残りはまだ東電等が握っています。一般家庭に向けて電気を売っている会社の上位はガス系、ケーブルテレビ系、電話会社系が多くなっています。

3)原発と電力自由化

国は、福島原発事故の対応を東電に一手に引き受けさせるため、「東電の総力を挙げて」という「魔法のキーワード」を使い、東電の救済、つまり、自由化をなし崩しにする政策を12月に閣議決定しました。「電力システム改革貫徹のための政策小委員会」が、名前とは矛盾する政策を決めています。

ベースロード電源市場を2019年に新設しますが、東電も含めて原発を持っている電力会社を存続させるために、原発を使わせるという市場です。だいたい10～20%は、発電コストが低いとされる原発と石炭をベースとして必ず新電力は使わなければいけないというようにします。COP21で、今世紀後半にはCO2排出を実質０にすると決めたので、他の国では造らない流れになっている石炭火力発電所も、日本だけが今造ろうとしているのです。

4)再生可能エネルギーと電力自由化

環境省のポテンシャル評価に基づいた試算では3.8兆kWhの電気量を、日本の風力発電で作り出せます。日本の電力需要が約8000億kWh。風力には様々な問題もあり、太陽光、バイオマス、小水力等と組み合わせれば、10分の１くらいで十分。2030年に再エネ100%は可能と考えています。

日本の再エネは、「固定価格買取制度（FIT）」により、普通の電気代よりも高い値段で買い取る仕組みがあります。この高い分を負担しているのは消費者で、国民負担が増えるという理由で、買取価格を下げるだけでなく、買い取る仕組み自体をやめさせようという動きもあります。一方で、再エネがほしいという人も多いのに、電源の内訳表示は義務化されませんでした。義務化し、共通の様式で表示した方がよいはずです。

5)新電力比較サイトで遊んでみる

インターネットの新電力比較サイトはいくつかありますが、東電のサイトでも使われている「エネチェンジ」を見てみます。例えば、「安い電気」で検索します。１番安いと出てくるものの内訳を見ると、4,000円分のギフト券がもらえるとか、本業のサービスを一緒に利用すると割引になるとか、実はほとんど安くなっていないものもあります。

6)私たちはどうすれば良いの？

脱原発と言いながら、東電にお金を払うのを止めませんか？社会を変えるために、とにかくスイッチしましょう。実は、変えたい電力会社に電話等で申し込むだけで簡単に替えられます。もう一つ、再エネの発電所を造ることが必要で、それを応援しましょう。また、日本のエネルギー政策を変えましょう。地方議会での決議とか意見書、地元国会議員への要望、パブコメ、マスコミへの意見、そして「パワーシフト・キャンペーン」への賛同等出来ることはたくさんあります。

参加者の声（アンケート結果などから）

・電力自由化によって日本各地にご当地発電が拡がっている様子を知れてよかった。

企画・運営

鹿住　貴之（認定NPO法人JUON(樹恩) NETWORK）

１６　子どもの貧困 ～地域とのつながりをつむぐ～

開催目的

６人に１人の子どもたちが“貧困”状態にある日本。経済的な“貧困”だけを連想してしまいがちですが、実態としては、人とのつながり・地域とのつながり・社会とのつながりが、保つことができない状態でもあります。そこで、この分科会では、子どもたちと地域のつながりを視点に、そのつながりをつむいでいくことについて考えます。

開催日時

２月１２日（日）10:00～12:30

参加者数

33 名（参加者 24 名、出演者２名、スタッフ７名）

出演者

高橋 亜美さん（社会福祉法人子供の家 アフターケア相談所「ゆずりは」）

小林 普子さん（NPO 法人みんなのおうち）

粟澤 稚富美さん（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター 子育てカフェ「モグモグ」）

内容・成果と課題

●プログラムの論点

子どもたちの貧困が社会問題として大きく取り上げられる一方で、経済的な貧困だけがフォーカスされがちな現状があります。しかし、現状としては、人とのつながり・地域とのつながり・社会とのつながりが断たれてしまっている状況があり、それは経済的な側面だけで語ることができない複雑、かつ深刻な状況にあります。また、「子ども」といっても、背景が違う様々な子どもたちが地域には暮らしています。この分科会では、外国にルーツを持つ子どもたちの支援をしている方、児童養護施設からの自立を目指す人たちの支援をしている方から、現在の状況を報告していただき、子どもたちと地域のつながりについて考えました。

●小林 普子さん（NPO 法人みんなのおうち理事/副代表）からの発表

・新宿区の特徴は外国人区民が約１２％

・2017 年１月区民 338,488 人　外国人住民 41,235 人（12%）国籍数 126 ヶ国

・「こどもクラブ新宿」は 2007 年、NPO 法人みんなのおうちと区との協働事業として開始。自分の日本語力を正しく知り、夢と希望を持って高校進学ができる生徒に成ってもらうことを目標にスタート。

・３つの教育課題

①日本語の課題

・文章を書くことの困難。日本生まれの子どもも含め文章が書けない

②教科学習

・来日前に受けてきた教育に左右される。国によっては理科、社会、体育、音楽などの教科学習が無いケースもあり

③中学校卒業後の道

・高校卒業後の進路は家庭の経済力に左右される

・ビザの種類によっては、週２８時間以上は働くことができず、自立ができない

・３つの家庭的課題

①経済的困難

・多くの家庭が生活保護世帯であったり、保護者が複数場所で仕事しているので、親子のコミュニケーションが取りにくい環境がある

②不安定な家庭

・シングルマザーの家庭では、母親の仕事時間が長く、本人が見捨てられている感覚が強い

③ビザの問題

・家族滞在ビザからの変更の困難

●高橋亜美さん（アフターケア相談所ゆずりは所長）からの発表

・施設を退所した子どもたちは家庭からの援助が受けられず、生活の一切を自らで担い、失敗することも立ち止まることもできない緊張状態のなかで日々の支援を維持していかねばならない

・過去のトラウマが起因するコミュニケーション能力の欠如や、精神疾患の発病、発達障がい・低学歴・無資格などの課題を抱えるケースが多い

・幾重にも重なる見えないハンディを背負うなかで、生活破綻に陥るケースは決してすくなくない

・退所者が若年ホームレスになったり、犯罪をしたり、自殺をしたりする確率は一般家庭出身の子どもたちよりもはるかに高いことは、今あらゆる機関の調査研究で明らかにされた

・社会的養護の役割には、在籍中の養育の保障のみならず、子どもたちが退所後も安心で安全な生活を送る事が出来るよう支援することは当然の責務

・しかし、社会的養護のアフターケア支援は十分に行き届いていないのが現状であり、施設のアフターケアは長年問題視されながらも適切に扱われてこなかった課題

●参加者からの質問

・子どもたちの支援で気を付けていることはありますか？

→自分自身の固定観念を押し付けないことに気を付けています。一般的な正論ではなく、子どもたち自身の状況をみながら、彼らが自立に向けて選択していることに目を向けています。

・子どもたちへの支援はどんなことが考えられるか？

→施設で暮らす子どもたちに、ボランティアで直接かかわる機会というのは、なかなかないと考えられます。一方で、外国にルーツを持つ子どもたちへの支援については、学習支援ボランティアの機会はあります。あまり活動やテーマをしぼりすぎずに、ボランティアの活動機会を探してください。

・ボランティアで子どもたちと関わるときにどんなことが求められますか？

→自分自身の成功体験を押し付けないでほしいと考えています。子どもたち自身の話をききながら、彼らとともに学びあうという姿勢で臨んでほしいと思います。また、子どもたちにとっては、専門職であろうが、ボランティアであろうが、関係ないと思っています。ぜひ、長く続ける気持ちをもって、参加してほしいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

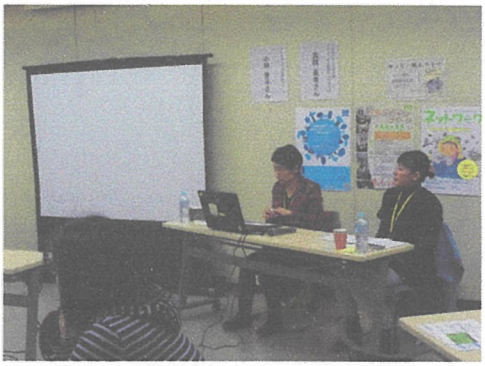
- 自分が取り組んでいる社会課題について再認識することができた。理解し、寄り添うことを大事に活動し続けたいと思います。
- 言葉にしてしまうことができないほど、濃い内容、時間、出会いでした。ありがとうございました。
- 色々な立場の方が参加されていて、勉強になりました。ボランティア等、参加する時の心がまえなど、覚悟をもって臨む…印象的でした。ありがとうございました。
- いろいろな状況の子がいるが、１人ひとりに寄り添い、理解する、価値観をおしつけない、自己肯定感をもてるようにしていかなければならないことを改めて感じた。
- これからどうするかが何かがみえた。子どもの権利条約をもう一度よく読みなおそうと思う。

企画・運営

上田　英司（NPO 法人 NICE）【主担当・報告書】

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

土屋　弦（明治大学）



２５　「やってみよう」からつながる可能性 Vol.1 ～精神障がい者フットボール体験～

開催目的

精神障がいのある人たちと、ウォーキングフットサルを楽しみながらボランティアについて考えてみること。ボランティアは特別なことをしなくても、皆さんの好きなことがボランティアにつながること

開催日時

２月１２日（日）10:00～12:30

参加者数

１８名（参加者１４名、スタッフ４名）

内容・成果と課題

【内容】

- 障がいに関係なくチーム分けをし、ウォーキングフットサルを行う。チーム名や得点した際に、みんなで行う喜びの表現を考え、楽しみながら交流を深めた。
- 趣味がボランティアになることもあり、特別なことではないことを知ってもらう機会を作ること。

【成果】

- スポーツを行うことで、障がいの有無に拘らず、自然な形で交流が図れ、障がいに対する理解が促進されやすいことが分かった。
- 「走ってはいけない」という制約のなかでフットサルを行うことで、年齢や性別、技術的な差を縮めることができ、誰でも参加しやすく楽しめた。
- 「相手が障がい者だから」という遠慮や、行き過ぎた配慮が、かえって偏見を助長してしまうことがあるが、スポーツを一緒にすることで障がい者へのイメージを少しは変えることができたと思われる。

【課題】

- イベントの周知が上手くできず、人集めの難しさを痛感した。
- 段取りが出来ておらず、当日行き当たりばったりのことが多く、スタッフの皆さんに助けられた。

参加者の声（アンケート結果などから）

- スポーツをとおして、参加者がすぐ仲良くなり、とても楽しい時間を過ごせました。スポーツの力のすごさを改めて実感しました。
- サッカー/フットサルは燃えるのでやってよかったです。スポーツをすると初めての人でも垣根がなくなりよかったです。
- 体力面で不安の有る方でたっても、トライしやすいと思いました。今後、このような集いが更にひろがっていけば嬉しいです。

企画・運営

徳堂　泰作（NPO 法人日本ソーシャルフットボール協会）【主担当・報告書】

二瓶　良恵（中野ボランティアセンター）

後藤　浩二（スープの会）

熊谷　紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

１７　私にもできる！ 専門性を活かした地域活動

開催目的

保育士や看護師など、専門職として働く人びと。その専門性を地域活動に活かす取り組みが進めば、地域活動がより豊かになるのではないでしょうか。当分科会では、専門職をどのように地域の活動と結びつけていけるのか、実際の活動事例から活動のコツや協働のメリットなどを伺いながら考えたいと思います。

開催日時

２月１２日（日）14:00～16:30

参加者数

38 名（参加者 29 名、出演者３名、スタッフ６名）

出演者

佐藤匡史さん（川口こども食堂 代表）

香本なぎささん（看護師/コミュニティナース育成プロジェクト 一期生）

宮川裕子さん（訪問歯科医師/特定非営利活動法人自立生活サポートセンターもやい・新宿ごはんプラス）

内容・成果と課題

【プログラム内容】

１ 趣旨説明

実行委員で分科会のファシリテーターを務める酒井より、本分科会の開催主旨説明を行いました。

２ 登壇者自己紹介および参加者同士の自己紹介

３ 登壇者の活動紹介

1）香本さんより、コミュニティナースの活動紹介

- 休日にコミュニティナースとして活動を実施。
- コミュニティナースは、病気の有無関係なく、日常的に住民と関わる。
- 医療機関に関わる前に高齢者の見守りには限界があり、地域コミュニティの限界を感じている。子育てをはじめ、看護師の新しいキャリアの選択肢として考えている。
- 綾部市、谷根千エリア、文京区での活動事例紹介。

2）宮川さんより、訪問歯科医師と新宿ごはんプラスでの活動紹介

- もやい・新宿ごはんプラスでボランティアとして活動している。
- 訪問歯科医師をしているが、訪問先は高齢者や障害者が多い。
- 訪問歯科医師の仕事を通じて得られた気付きから、何かできないかと考え、入居支援事業、生活相談支援事業、交流事業、講演事業などを行っているもやいに相談すると、新宿ごはんプラスを紹介され、活動を開始する。

・新宿ごはんプラスでは、毎回１００人ぐらいの方が参加される。知的障害の方も

・新宿ごはんプラスでの活動を通じて、生活保護の課題や口腔衛生の課題が見出された。貧困は本人だけの問題ではなく、社会課題として考える必要がある。

3）佐藤さんより、川口こども食堂の活動紹介

・2016 年に川口こども食堂を開始。こども食堂を取り巻く問題として、共生食堂とケア付き食堂の違いが問題として浮き出てきた。こども食堂は経済的貧困と心の貧困をケアすることだが、経済的貧困のみフォーカスがあたっている。共生食堂とケア付き食堂の両立はできないのか。

・川口こども食堂では、様々なゲストにきてもらっている。JAL のパイロット、ミス・ユニバース埼玉、国会議員、消防士、保育士、自衛隊、農福連携など。

・様々なゲストの方を呼ぶ目的は、子どもの学び体験につなげること。

・イベントは共生食堂的位置づけであるが、そのイベントを利用して、寄付を募るなどして、学習支援などのケア付き食堂にもっていっている。

・こども食堂とは、自分たちのために動いていくれた大人たちがいたことを子どもたちの記憶の片隅に残すための地域活動。その活動を支える専門家ボランティアの方との地域協働活動である。

4 パネルディスカッション

来場者への「ヒアリングシート」に基き、登壇者より以下の質問への回答を行いました。

1）どのように地域にはいっていったのか？どのように専門職の方とつながったのか

2）地域に継続的にかかわるために実施していること、意識していることは。

3）こども食堂を利用される方への広報や理解してもらうためにしていることは。

4）今やっている活動にたどり着いたきっかけは。

5）本業とのバランスは。

6）地域での活動の中で、困難だったことや失敗事例は。

7）（こども食堂に）専門職を呼ぶことで、大変だったことや難しさは。

8）団体内で活動されている方とゲストで来ている方に対する対価をどう考えるか。

9）有資格者を目指している方、リタイアした方への関わりをどう考えればよいか。

10）資格を持っていない人との関わりはどう考えているか。

【成果と課題】

専門職が業務の枠組みにとらわれずに地域活動へ取り組む姿をロールモデルとして提示することができたと思います。登壇者それぞれが活動に至るまでに抱えていた課題も生々しく語られ、参加者を惹きつけていました。今回は「専門職×地域活動」の双方の事例発信が中心となっていたため、個々の事例の掘り下げや、参加者を交えたディスカッションの要望も頂きました。今後は専門職と地域活動のマッチングなどに展開させていくことも検討したいと思います。

5 質疑応答

6 登壇者より一言挨拶

参加者の声（アンケート結果などから）

・社会にいるたくさんの方一専門性がある・ないに関わらず、たくさんの人達がかかわることによって、参加者にも、活動者にも、よいことあると感じました。それぞれの方のお話のなかに、今後のヒントがたくさんあり、とても勉強になりました。ありがとうございました。

・自分から積極的に行動をおこさないと何もできないと実感した。人と人とのつながりの大切さを改めて感じた。

・様々な人が専門性や想いを地域に活かされているということを知ってとても心強かった。

企画・運営

酒井　玲奈（NPO 保育力研究所）【主担当・報告書】

杉村　郁雄（日本ファシリテーション協会）

小原　恵美（社会福祉法人正吉福祉会）

志田　五十鈴（こまえボランティアセンター）

１８　本音で話す。課題を解決する中間支援組織のミライ。

開催目的

中間支援組織には「中間支援組織は課題解決にどれだけ効果を発揮できているか。職員がスキルをアップするだけでは足りないのではないか。」という疑問を投げかけられることが多くなっていると感じます。中間支援組織を使う側の本音を聞きながら、地域の課題を解決できる中間支援組織の未来を考えます。地域のみんなが活用できる中間支援組織への変革を目指した、それぞれの立場の一歩を踏み出すきっかけづくりのために、この分科会を企画しました。

開催日時

２月１２日（日）14:00～16:30

参加者数

28名（参加者１８名、出演者３名、スタッフ７名）

出演者

手塚 明美さん　(認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会　副理事長・事務局長)

髙山 陽介さん　(文京区子育てサークルワラビー　幹事)

田邊 健史さん　(NPO法人NPOサポートセンター　事務局次長)

内容・成果と課題

１　内容

1) 中間支援組織の本音　(手塚さんより)

2) 中間支援を使う側の本音 (髙山さんより)

3) セッション (田邊さんのコーディネート)

4) 参加者意見共有

２　成果

中間支援組織の運営側の視点から、どのような目標を立てて運営しているかのお話からスタートし、活用する側の経験談と期待を伺いました。運営側が、どのように情報を届け、人材を活用しているのかの現状を知り、その結果が専門的な支援が日常的になった等、成果の部分までを参加者が見えやすい形で理解することができました。活用側からは、うまく活用して活動が広がった事例を聞きつつも、更に期待することや、実はなかなか見えない部分があるという話から、中間支援側が改善しなければならない部分を明らかにすることができました。

更に、コーディネーターが会場からの質問をもとに、出演者とセッションすることで、疑問に対する答えがより明確になりました。普段、両方の立場の話を同時に聞くこと、参加者も両方の側が機会は多くないと感じているので、それが実現でき、本音を知ってよりよい中間支援の形を意識できたことは成果でした。

３　課題

自分がその立場にありながら、中間支援の機能が十分に発揮できていない、または理解しないまま支援しているという現状がわかりました。さまざまな課題を解決していくために、まずは意識の変革が必要と感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- もやもやしている自分がいて「課題を解決」しようというキャッチーなタイトルにフラフラと寄ってきました。「よく知る、見つめること（もやもやも含め）」から初めて、「課題を解決する」一歩を踏み出す主語は自分であることを再認識しました。
- 中間支援組織とはなにか、知らなかったので大いに参考になった。それにしてもコーディネーターお二人の熱意はすごい。日本全国にこういう人がいっぱいいたら日本社会は変わるでしょうね。
- 中間支援として、手塚さんの話に共感、参考になりました。高山さんの市民としての目、なるほどと。これから活かします!!

企画・運営

根本　浩典（文京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

鹿住　貴之（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

新倉　聖子（NPO法人みんなのおうち）

１９　「やってみよう」からつながる可能性 vol.2
～精神障がいのある方の可能性～

開催目的

精神障がいのある方のボランティア活動の可能性を広げたい。現状では、なかなか活動に繋がりにくい場合がある精神障がい者も、個人を見つめれば活動できることが多くあるのではとの問題意識から、活動の可能性を可視化するために、「できること」「できないこと」を付箋に書いて貼り出すという試みをしました。

開催日時

２月１２日（日）14:00～16:00

参加者数

29 名（参加者 22 名、出演者２名、スタッフ５名）

内容・成果と課題

（内容）

・りんご形の付箋に、精神障がいのある方が「できること」もしくは「できないこと」を書いてもらい、当事者・支援者の発表を聞いた上で、再度追加しました。

（成果）

・りんごの木に貼った付箋が、赤（できること・得意なこと）：87 枚、緑（できないこと・苦手なこと）が 44 枚となった。赤が緑のほぼ倍の数であり、できることが多くあることが可視化されました。

・連動企画にしたことで注目を集められ、単一で実施するよりも多様な方が参加されました。

・当事者も多く参加したことで、各グループに当事者（協力団体）の方に入っていただくことができ、当事者・支援者が交流できる良い意見交換の時間になったと思います。

（課題）

・実施時間を２時間に限ったことで、意見交換の時間が短めになってしまいました（時間設定後に当事者・支援者の話を聞くコンテンツを追加した為）。早期からプログラムの熟慮が必要でした。

・可視化の方法についても、検討が甘かったため参加者から「できること」「できないこと」という表現について意見をいただいてしまった。あえて刺激的な表現を使っているという意図もありますが、もう少しスムーズに受け入れられる表現・やり方があったかもしれません。

参加者の声（アンケート結果などから）

・本当はもっと精神をわずらった方のお話（実体験）のようなものをお聞きしたかった。

・初めから「できること」「できないこと」の書き出しから始まったことには正直違和感を感じました。「できる、できない」は障がいのあるなしにかぎるものではなく、その人各々の性格や個性に起因することが多く、また「できない」と断じることはできません。

・当事者の方にとっては自らふみ出すこと、好きなことをやることの素晴らしさを再認識される機会になられたと思いますが、支援者がどのように支援していけば良いのかということについては深まりがなかったと思います。

・どんな人でも可能性があることをあらためて知ることができてよかったです。

・とても良い刺激になりました。日々の活動に活かしたいと思います。

・当事者の方、支援者の方、関わりのある方がグループ内で話したり、一緒に考える機会はあまりないので貴重な時間となりました。

・あらためて、支援する側の姿勢に気付けたかなと思いました。

・ストレングスの視点について、再認識しました。当事者の力を再確認しました。

・グループで話し合う時間がもう少し長ければうれしかったです。

企画・運営

二瓶　良恵（中野ボランティアセンター）【主担当・報告書】

徳堂　泰作（ＮＰＯ法人日本ソーシャルフットボール協会）

熊谷　紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

後藤　浩二（スープの会）

土屋　弦（明治大学）

２０　ひきこもり高齢化～地域や社会と繋がる～

開催目的

数年前までひきこもりは若者の問題であると考えられてきました。しかし近年ではひきこもりの長期化や、社会に出た後に自信を無くし、失業という形でひきこもりになってしまうケース等により、40代、50代の年齢層が増えてきています。このひきこもり高齢化をテーマに、当事者への理解を深め、さまざまな分野から出て来ている課題の共有、地域との繋がりの重要性、私たち市民ができることについて皆さんと共に考えていきたいと思います。

開催日時

2月12日（日）14:00～16:30

参加者数

38名(分科会参加者数27名、出演者３名、スタッフ８名)

出演者

徳丸　享さん(板橋区保健所・東京臨床心理士会　会長)

菅野　周平さん(多摩若者サポートステーション 統括コーディネーター)

中川　弥生子さん(中野区民生児童委員)

内容・成果と課題

1．プログラム内容

１）はじめに～分科会の目的～

・主担当より、この分科会の目的についてお話しさせて頂きました。

２）登壇者のお話

①ひきこもり、中高年ひきこもりとは？

<u>徳丸　享さん</u>

・2016年9月、内閣府は、学校や仕事に行かず半年間ほとんど外出しない15～39歳の「ひきこもり」の人が、全国に54万1千人いるという推計値を発表した。ひきこもり期間7年以上が、6年前の推計値16.9%に比べ、34.7%と比率が倍増し、長期化がうかがえます。また調査対象が39歳までなので、40歳以上の調査が行われていません。KHJ家族会による平成27年度の統計では、全ひきこもり数349名の22.9%を40歳以上が占めていたことから、これを内閣府の推計値にあてはめ算定すると40歳以上が16万人存在すると考えられます。

・何故ひきこもってしまうのか。生育環境（家族環境・教育環境）、何らかの障害（発達障害・精神障害）、現在の家族状況（介護問題）など、ひきこもるわけは、一人ひとり異なり、何か一つの原因でひきこもるわけではありません。

・社会の理解をすすめ、地域に「ひきこもり」を理解できる人が増えること。必要なことは、指導ではなく、支援つまりつなぐことです。仕事や学校に行くことが問題の解決ではなく、自尊心を取り戻すことが大切。生き方、生活の仕方はいろいろあって良い。

②地域若者サポートステーション

<u>菅野　周平さん</u>

・地域若者サポートステーションでは、働くことに悩みを抱えている15歳～39歳までの若者に対し、キャリアコンサルタントなどによる専門的な相談、コミュニケーション訓練などによるステップアップ、協力企業への就労体験などにより、就労に向けた支援を行っています。

・サポートステーションは働きたいけどその具体的な方法が解らない、ブランクがあり不安等、就労意欲がある方限定になってしまうため、自ら出向いて来られないと支援できない。そこがサポートステーションの支援対象の限界点ではあると思います。

・ひきこもりの方に多いのは、自己肯定感の低さ。そこで大切なのが、地域のつながりです。支援者の言葉や評価より、地域社会での関わりの中で生まれる評価が何倍にも本人には響くことがある。一か月単位で職場体験に行き、その場にいるスタッフに注意されたり褒められたりする中で、ちゃんと評価されていると思えるという声が多くある。自分もちゃんと社会に受け入られているという実感が湧いていくというお話がありました。

③地域の関わり方

<u>中川　弥生子さん</u>

・なかの地域福祉推進フォーラムに参加し、社協が関係機関を対象にアンケート調査を行った所、中高年ひきこもりらしい人が167人いること、またそういった方々が安心できる場所が地域にあれば、動き出すきっかけになるのだなと思いました。ひきこもっている当事者や家族と、地域の一員としてどう関わっていけばよいかと思うようになりました。

・実際に、色々な地域にある居場所に参加して、まず思ったことは、当事者が自分たちで様々な内容を企画し、運営している。新聞、TV等、マスコミなどへの対応も、しっかり出来ていて活気があり驚いた。ただそういった場所は比較的若い年齢層の方が多かった。

・社会との接点が無く、比較的若い当事者とのギャップを感じない居場所を作っていければと思い、昨年9月から5回程、社協の職員の方、地域のボランティア活動をされている方々と会議を重ね、今年の5月を目標に、グランドオープンを目指しています。

1）グループワーク

・参加者でグループを作りそれぞれ意見を出し合いました。参加者同士様々な意見が出てきました。出てきた意見を全体にシェアしました。

2）～分科会を通して～

・まとめを講師の方からいただきました。

2.成果と課題

・ひきこもる原因は十人十色、対策や支援の在りかたも様々あって良いのではないか等、ひきこもり状態にある人たちへの理解が深まり、就労支援だけではない地域の受け皿、つながりの重要性が感じられたのではないでしょうか。

・課題として、区民への情報発信や、サポート機関や支援制度などの周知がまだまだ不足しているように感じました。情報提供の場を今後どんどん増やしていければと思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・いろいろキーワードが出てきて、何かできることあるのではないかと考えるきっかけになった。

・引きこもりが生まれる社会の背景、課題についてより考え、取り組みについても深めていきたい。

サポステ～自立支援など、行政の支援のあり方が大分複雑になっていることが分かりました。もっと詳しく勉強しないとと強く感じました。

企画・運営

宮崎　晃（青少年自立援助センター）【主担当・報告書】

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

２１　イスラム教徒との交流会で、イスラム文化を理解しよう

開催目的

全世界で４人に１人がイスラム教徒（ムスリム）と言われていますが、欧州ではイスラム教徒の移民の増加で、また、米国ではトランプ大統領の施策で混乱がおきています。一方、日本では、最近は街なかでムスリムの方をよく目にしますが、なんとなくムスリムは怖いとか、あるいはよくわからないという方が多いのではないでしょうか。

そこで、イスラム文化圏のムスリムと日本の非ムスリム（ノンムスリム）の青年との交流会を企画し、文化の差異を乗り越え、人と人とが直接理解しあえることを目指して、イスラム圏との多文化共生の小さな一歩を踏み出してゆきたいと考えました。

開催日時

２月１２日（日）13:30～16:30

参加者数

４４名（参加者２８名、出演者１０名、スタッフ６名）

【ムスリム参加者のルーツ】

モロッコ／サウジアラビア／シリア／アフガニスタン／パキスタン／バングラディシュ

シンガポール／インドネシア／日本

内容・成果と課題

１）内容

・参加者全員に自己紹介（参加理由、ムスリムへの質問を含む）・・・・　５０分

・講師講演「来日以来のムスリムとしての日常生活について」・・・・　２０分

・ムスリム／ノンムスリムの対話（グループ別）　・・・・・・・・・・・　８５分

・中学１年生のモスク見学の感想文朗読・・・・・・・・・・・・・・・　５分

・グループ別発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２０分

２）成果と課題

巷間には、ノンムスリムに対するイスラム教に関するイベントはかなりの頻度で開催されていますが、ムスリムとノンムスリムとが、直接交流できるイベントは然程なく、また、今回のようにモロッコ、シリア、サウジアラビア、アフガニスタン、パキスタン、シンガポール、インドネシアとイスラム圏の多様な国にルーツを持つムスリムが一同に会し、ノンムスリム（大半が日本人）と交流するというイベントは、きわめて稀といっても過言ではありません。

参加者の感想からは、ムスリムというカテゴライズされた人々と交流するのではなく、ムスリムを一人の生身の人間として交流できたことが最大の成果であったとの声が多く寄せられました。

従来、ムスリムを「なんとなく近づき難い」と感じていた人々が、「なんだ、ムスリムと言っても同じ人間じゃないか」と思えるようになったことは、現在もまだ日本が抱える様々な差別問題を解決する上での小さいが確実な突破口にもなるのではないかと実感しました。

一方で、参加者からは、さらに、イスラムに関する情報がほしいという声がかなり寄せられまし

たので、今後、希望者の方々に、イスラム関連の情報をご提供してゆきたいと考えております。

また、分科会実施にご協力をして頂いた方々に御礼に伺ったところ、継続してムスリム/ノンムスリムの交流イベントを行いたいとの意向が伝えられましたので、ボランタリーフォーラムを一過性のものとせず、今後も多文化共生に資する活動を続けてまいりたいと決意しております。

参加者の声（アンケート結果などから）

1）予想以上に良い時間、経験となり、参加してよかった。思っていた以上に色々な話を聞けて、気付くことも多くあり、宗教ということではなく同じ人間として素晴らしい方々と交流できたことがうれしいという、幸せな気分となりました。

2）イスラム文化について学んだり、イスラム圏内の方と交流できたらと思い、参加したのですが、コーランについてももちろんお話をいただいたのですが、特別なようなことはなしにお話することができ、とても楽しかったです。

3）時間がもっと欲しかったです。もっとイスラム教のことを知りたいと思いました。今後のイベントについても期待しています。

4）顔の見える関係ということの大切さを気づかされました。アザトさんが語ったこと、グループワークでムハマドさんがイスラエル問題で熱く語っていたこと、イスラム教徒と一くくりにしても、一人一人に着目すれば趣味も出身地も異なるのは当たり前。そんな「個人」を知ることで、自分と共通点が見つかれば親近感が湧くのかもしれないし、異なる点があれば、そこから好奇心がもてるかもしれない。そんな関係から、理屈抜きにザックバランと語り合えたのかなと思いました。

5）慶応大学准教授　アルマンスール先生（ｅメールから）

「本当にありがとうございました。このような機会を増やしてほしいです。とても素晴らし出来事でした。今まで講演ばかりでしたが、中川さんのおかげで身近に人と対話できてよかったです」とアンケート用紙に記載して頂きましたが、ご本人の口から直接、「一対一の対話の重要性を再認識しました」とお聞きしました。

企画・運営

中川　径治（昭和電装株式会社）【主担当・報告書】

高橋　沙織（みたかボランティアセンター）

高橋　義博（調布市市民活動支援センター）

２２　クロージング～今日から動き出そう、創り出そう

開催目的

ボランタリーフォーラムTOKYO2017のクロージングとして、「今日から動き出そう創りだそう」をみんなで考えます。それぞれの分科会でそれぞれが感じたことを皆で共有し、身近な暮らしの中の小さな気づきから明日への一歩を考えます。私たち一人ひとりの素朴な疑問や想いが、地域、社会や制度・施策に変化をもたらすことでしょう。

参加者数

58名

内容・成果と課題

クロージングでは、各分科会の中で学んできたことや、「今日から動き出そう創りだそう」に対して自身がどんなことができるか、各グループにて共有しました。

・2:6:2(ボランティアを実際にしている2:機会があったらやってみたい6:全くやる気が　ない2)6の部分の人たちにとってどんなアプローチをかけ、満足度を与えられるか。趣味でボランテイアをしている方も沢山いる。余暇の中でもボランテイアが広がっていけばいいかなと考ました。

・分科会に参加して、ボランテイアっていったいなんでしょうねと考える時間だった。色々考えた結果、自分ができることをできる範囲でやることが大切かなと改めて考える時間になった。自分が楽しいでやることを楽しみながらやり続けることにしました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・一緒にやりたいなという意識の中でボランティアをやっているとボランティアという意識は少ないなと感じた。共感や伝え方があるんだと思った。やってみようという共感ができた。

・自身は市民活動を行なっているが、このフォーラムに来ている方達の中には私なんて何ができるのかしらと思い中々、一歩を踏み出すことができない人も参加されていた。今後、一緒に一歩を踏み出す手　伝いも自身もできればと感じた。

・学生の活動についての分科会に参加して、今までは社会人向けにボランティアを考えていたが、学生とも連携を考えながら今後は活動をしていきたい。

・他人事とは考えるず、自分ごととして考えていくことが大事だと感じた。今回の参加者にお会いできて嬉しく思います。

・このフォーラムを今年初めて知ったが（登壇者として参加することで）、今まで参加してこなかったことを勿体無いと感じてしまった。どの分科会も参加したいもので、選ぶのに時間が掛かった。

・楽しくやることが大切だと思った。

●神元実行委員長より

私自身も色々な分科会に出て色々な学びがあった。風俗店に言ってフィールドワーク、何よりもこの仕事をしているとバレたくない。障害者の家族もそう言うこともある。当事者自身も感じていることが多い。社会課題も一緒に考えることがある。同質が集まるのではなく異質を入れていく社会になればなと思いました。

●東京ボランティア・市民活動センター所長　山崎美貴子さんよりコメント

市民社会を作るボランタリーフォーラムでは、感じたことを言って欲しい、思ったことを言ってほしい気づきを点にして線にして繋げていきます。専門職の中では専門職だけでは煮詰まってしまう、伸びしろを伸ばしていけたら突破口を開こうよというテーマも多かったです。ボランテイア活動楽しみの中で続けられないときもある、一歩立ち止まってみましょう。自信を追い込みながら、制度に繋がらない人たちもいます。制度につながるよりも制度を自身から拒否してしまいます。そこで気がつきます、立ち上げを行なっていきたいと。色んな社会問題が届いていない現在、一緒になって悩む、揺れる、ときには立ち止まることが大切です。今回は高齢者の問題よりも若者の問題に焦点が寄っていました。それだけ若者の問題が生まれているのではないでしょうか。若い皆様方と一緒に色々な問題、若者から高齢者まで一緒に考えていきたいです。

企画・運営

飯倉　聖子（NPO 法人みんなのおうち）【主担当・報告書】

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

粟澤　稚富美（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター子育てカフェ「モグモグ」）

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）

土屋　弦（明治大学法学部）

和田　更紗（明治大学和泉ボランティアセンター）

宮崎　晃（青少年自立援助センター）

徳堂　泰作（NPO 法人日本ソーシャルフットボール協会）

小原　恵美（やのくち正吉苑）

２６　「想いをかたちに」出会いの広場～民間助成金相談～

開催目的

ボランティア・市民活動団体にとって、活動の充実や発展のために助成金は重要な財源のひとつです。しかし、助成金申請をしてもなかなか獲得することができないという声も聞かれます。一方、助成団体の方からは、さまざまな団体の話を伺うことで、多様な活動の様子や地域の課題について把握したいという希望も聞かれます。申請する側、助成をする側と出会い、ゆっくり話してみませんか？民間助成金の情報も展示しています。

参加団体

２３名（参加者８名、出演者１３名、スタッフ２名）

相談協力団体（敬称略・五十音順）

＜相談協力団体＞

公益財団法人キリン福祉財団、公益財団法人草の根事業育成財団、全労済、社会福祉法人中日新聞社会事業団東京支部、NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド、一般財団法人松翁会、TOTO 株式会社

＜資料提供協力団体＞

公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団、独立行政法人国際交流基金アジアセンター、公益財団法人東京都福祉保健財団

＜企画運営協力＞東京都社会福祉協議会民間助成団体部会

内容・成果と課題

＜プログラム内容＞

1　助成金の申請に関する相談

2　助成金募集に関する展示・資料コーナー

東京都社会福祉協議会民間助成団体部会の会員団体をはじめ、民間助成団体の協力のもと、交流スペースとして、民間助成金の相談コーナーと募集情報コーナーを設けました。２日間を通して６の市民活動団体からの相談を、下記の民間助成団体の役職員が個別相談として対応しました。

相談内容は、各助成団体の助成金プログラムの応募要件に関する相談や、申請用紙の記入方法の相談など、具体的なやりとりもありました。また、どのような助成金が自身の活動に適しているかなどの資金全般のことや、申請を検討している事業に対する企画や広報のしかたなど、助成金の相談を切り口から運営や活動の相談へと広がりをみせているときもあり、時間をかけて話し合い、交流しました。

＜成果と課題＞

日頃は直接話す機会の少ない、多様な活動に取り組む市民活動団体と多様な助成プログラムを実施する助成団体が、それぞれの対象分野や「想い」について話したり、聴いたりしながら、「想いをかたちに」するため、ゆったりと考える時間になったか思います。また、複数の助成団体が一緒に相談にのる場面もあり、助成団体がそれぞれの視点から話していくことで助成団体相互の理解につながるきっかけにもなりました。色々な立場の人たちが交流し合うフォーラムとして、この場はNPOと民間助成団体の出会いの貴重な場となっているため、今後も続けていきたいと思います。ただし、今年度は参加者が少なかったため、開催形式や時間等の変更について、検討の余地があるかと思われます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ご担当の方と直接コミュニケーションできて、疑問や誤解を解消することができた。
- 大変勉強になりました。
- 助成金について「こんなに基本的なことを聞いてしまってもいいのかな」と最初、不安なりながら来たのですが、きさくな助成団体の方との話を通じてもやもやとしていた部分がすっと晴れました。

企画・運営

長谷部　俊介（東京ボランティア・市民活動センター）

野崎　勝也（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

27　Open Cafe

開催目的

だれもがホッとできる、くつろぎと交流のスペースをつくります。フォーラム参加者、当日は、カフェの運営を一緒にやっていただくボランティアを募り、TVAC 来所者、ボランティア参加者とともに、みんなでつくるカフェを目指します。

参加者数

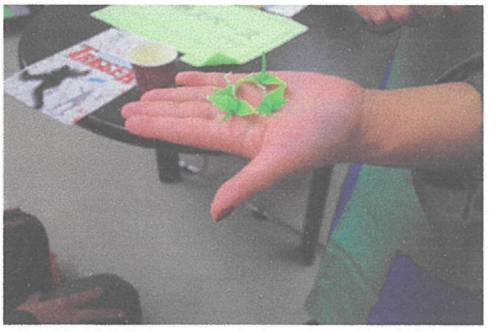
カフェ利用者：約300名（2日間）

内容・成果と課題

フォーラム開催中、東京ボランティア・市民活動センターのフリースペースにて以下を実施しました。

■休憩スペース（カフェ）の運営

- スペース利用者に、あたたかいお茶・コーヒーを１杯ずつ淹れて提供
- スペース利用者やフォーラム参加者とのおしゃべり・交流
- スペース利用者とともに、会場の飾りつけ
- 参加者同士の交流のきっかけづくり



■当日運営ボランティアの募集・受入等

- 事前にボランティアを募集
- 当日も随時、ボランティア希望者を募集・受入
- ボランティア参加者とともに、心地いい空間づくりを実施

参加者の声（アンケート結果などから）

＜参加者の声＞

■ボランティア参加者「感想カード」

- 今日のボランティアでたくさんの人と話すことができて、楽しかったです。お茶美味しかったです。
- お茶ひとつでつながる縁の豊かさを感じることができました。楽しく過ごさせていただきありがとうございます。
- 毎年、カフェの手伝いをしているので、だいぶ作業にも慣れてきましたが、大人数来るので大変でした。でもやっていて楽しかったです。
- お茶を召し上がっているその時間に隣り合わせになった方同士が交流されている光景が見られてとても嬉しかったです。一期一会のきっかけづくりができたのかなと思います。お茶の温かさや香りは癒しの効果もありますね。リラックスできました。
- たくさんの方にあたたかい方侍者を提供するなかで交わされる一言ひとことに私自身がホッとあたたかなキモチになりました。多くの出会いをありがとう。
- たくさんの方がいらっしゃって少しずつですがお話できて楽しかったです。忙しいスタッフさんたちの少しでも安らぎの時間に役立てていたら幸いです。

・初めてお会いする方と接するのか苦手な私にとってチャレンジングな二日間でしたが、お越しいただいた皆さまに優しくしていただきとっても充実感が得られました。再会の喜びもあり嬉しかったです。

■カフェ利用者の声

・美味しいお茶をご馳走になりました。また来ます。

・ゆっくりくつろげました。

・来年もまたフォーラムきますよー。

・美味しいほうじ茶は最高です。

・おもてなしありがとうございます。

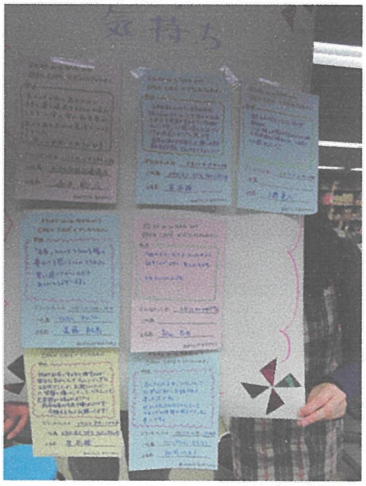
・お茶をいれていただきありがとうございます。

・お茶ご馳走さまでした。お陰様でカフェで参加した分科会のスタッフさんと再会してちょっとお話でき、新しい出会いとなりました。素敵な空間と時間を提供いただきありがとうございました。

企画・運営

森　玲子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

運営ボランティアのみなさん



２８　ふれあい満点市場～ＮＰＯ・ＮＧＯの作品展示販売～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。ふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しています。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことを聞いてみませんか。

参加団体

１３団体・６０名

認定ＮＰＯ法人幼い難民を考える会／ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／東京都青年団体連合／ＮＰＯ法人共同作業所かたくり／ＮＰＯ法人地球と友と歩む会/ＬＩＦＥ／ＮＰＯ法人飛鳥会　つばさ工房／ＮＰＯ法人ＭＨＦ／オレンジライン／こまえ工房こもれび／チェルノブイリ子ども基金・未来の福島子ども基金／薬物依存者を持つ家族の会はあもにい／民間相談機関連絡協議会／東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果と課題

「ふれあい満点市場」は、福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品を東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ１０階）で常設された委託販売スペースです。顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという想いをこめていますが、実際に活動されている方とふれあう機会はそんなに多くはありません。出展会場は、セントラルプラザ１階の区境ホールで、吹き抜けで明るく、人通りもあるオープンスペースです。セントラルプラザへ来所された方や買い物にいらした方、単に通行された方も気軽に立ち寄っていただけるような雰囲気づくりをし、そこで作り手の顔が見え、思いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。団体の方は商品についての工夫した点やこだわった点などを積極的に伝えたり、逆に団体の活動について尋ねる方もいらっしゃいました。来所された方だけではなく、出展団体同士の交流の場のひとつにもなっています。また、今年も都立新宿山吹高校の生徒さんが多数ボランティアとして協力してもらいました。独自に看板を作成したり、出展団体の販売のお手伝いや出張販売、チラシの配布等をはじめ貴重な体験となったようです。

企画・運営

小野　明子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

都立新宿山吹高校ボランティアの生徒さん

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO
開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップNPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランタリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランタリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランタリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランタリズム
10	2014	「気づく・築く　市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランタリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランタリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク

＊2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

<協賛・協力>

◆特　別　協　賛

株式会社ガイア

グラクソ・スミスクライン株式会社

中央ろうきん社会貢献基金

トヨタ自動車株式会社

株式会社三菱東京 UFJ 銀行

◆協　賛

NEC ネッツエスアイ株式会社

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団

NPO 法人 モバイル・コミュニケーション・ファンド

◆協　力

酒楽(さら)の里 あさひ山

認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK

全労済

ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

（50 音順・敬称略）

市民社会をつくるボランタリーフォーラムＴＯＫＹＯ２０１７　実行委員会名簿

●実行委員

	氏　名	所　属　団　体
1	芦澤　弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター
2	粟澤　稚富美	公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター　子育てカフェ「モグモグ」
3	飯倉　聖子	NPO法人みんなのおうち
4	市川　徹	株式会社世田谷社
5	上田　英司	ＮＰＯ法人ＮＩＣＥ
6	枝見　太朗	一般財団法人富士福祉事業団
7	圓藤　理江	一般社団法人インクルージョンネットかながわ
8	小野　育実	明星大学
9	小原　恵美	やのくち正吉苑
10	鹿住　貴之	認定ＮＰＯ法人ＪＵＯＮ（樹恩）ＮＥＴＷＯＲＫ
11	神元　幸津江	いたばし総合ボランティアセンター
12	後藤　浩二	スープの会
13	酒井　玲奈	保育力研究所（キッチン図鑑）
14	志田　五十鈴	狛江市市民活動支援センター
15	杉村　郁雄	ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会
16	鈴木　正昭	りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会）
17	高橋　沙織	みたかボランティア・センター
18	高橋　義博	調布市市民プラザあくろす　市民活動支援センター
19	土屋　弦	明治大学　法学部
20	徳堂　泰作	NPO法人日本ソーシャルフットボール協会
21	直井　友樹	NPO法人NICE
22	中川　径治	昭和電装株式会社
23	長瀬　健太郎	NPO法人good！
24	二瓶　良恵	中野ボランティアセンター
25	根本　浩典	文京ボランティア・市民活動センター
26	宮崎　晃	青少年自立援助センター
27	和田　更沙	明治大学和泉ボランティアセンター

50音順・敬称略

●事務局

	氏　名	所　属　団　体
28	長谷部　俊介	東京ボランティア・市民活動センター
29	熊谷　紀良	東京ボランティア・市民活動センター
30	小野　明子	東京ボランティア・市民活動センター
31	髙橋　紘之	東京ボランティア・市民活動センター
32	岡部　沙耶	東京ボランティア・市民活動センター【主担当】
33	山口　千紘	東京ボランティア・市民活動センター

✿ボランティアでご協力いただいたみなさま✿

Ｖフォーラム実施にあたっては、
のべ 50 名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、企画、当日の受付や会場誘導、
分科会の運営など、さまざまな場面で支えていただきました。
ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま

Ｖフォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の全体や分科会の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま
企画・運営に携わる実行委員のみなさま
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いします。

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO 2017 報告書

〈発　行〉 市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO 2017実行委員会
事務局　東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171　/　FAX 03-3235-0050
http://www.tvac.or.jp

〈発行月〉 2017年4月